
TWINS～果てしなきゼロ～

星河 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TWINS～果てしなきゼロ～

【Zコード】

N1423D

【作者名】

星河 翼

【あらすじ】

共学になると噂されている高校の学園祭に赴く中学三年生の少女薫。そこで出逢った、二卵性双子の占い師、金太、朗の二人。その二人と異次へと不思議な力で旅立つてしまう。その世界で、魔王に連れ去られた姫君の奪還に協力する羽目にあつことに。内容は、RPG風のファンタジーです。

#1 プロローグ

プロローグ

桜舞う小高い丘に続く小道を、次々と高校生が通り過ぎてゆく。空を見上げると、降りそそいで来る桃色の対比が美しい。

特にこの日は特別なので、そう感じる気持ちが強いのかもしれない。

そう、今日のこの日は高校の入学式。

青春と言つ一ページに、これから埋めて行く大事な思い出となるだろう岐点。今までの中学生と言つ小さい世界から、更に広い世界を体験出来る。

そんな、ちょっと大人になつて行く実感をヒシヒシと感じるのは、身に纏つているブレザーの制服のせいも有るのかも知れない。

そんな緊張と、喜びに浸つてゐるのは、小道の脇に一人佇む少年

……いや失礼、少女。名前は、一之瀬薰いちのせかおる 十六歳である。

少女は、ガードレールの側のかなり昔から有るであるう大きな木にもたれ掛かり、誰かを待つてゐる模様。

そこに、

「おーい。薰！待たせたな。わりいわりい！」

えらく元気の良い、弾んだ声をした色黒の青年が、柔らかそうな黒髪をなびかせながらやってきた。そして、目の前で止まつた。

「何たつてこいつがさあ、寝坊するもんだからあ……ははは」

言いながら手を頭に持つて行く仕種は、まだまだ少年のものである。

「……何言つてゐるんだか？お前、自分の事を言つてゐんじやない……人の所為にするのはみつともないぞ！」

こちらは、『キリツ』とした瞳をした色白の気品溢れる青年。時折見せる微笑が、穏やかな人柄を感じさせる。

実はこの二人は兄弟。それも双子。まあ、双子と言つても一卵性

なので、似てなくつてもおかしくはないのであるが。」ここまで似てないつてのも珍しいかもしれない。

まあ、どちらが兄で、どちらが弟かは、お約束とされるもので…つまりは、後からやつて来た物静かな青年が兄である。

名前は片桐朗かたぎりろう、十七歳。

そして、もう一人の色黒の青年が、弟の片桐金太かたぎり きんた。聞いた所、どうやら、彼等の祖父が彼等が産まれる前に、男の子だつたら『金太郎』と名付けようと頑固にも決めていたらしい。しかし、蓋を開けてみると、中から生まれ落ちたのは、双子。そこで、強引に『金太』と、『朗』に名前を分けたのである。

当時は、先に産まれた子を、兄。後に産まれた子を弟と考えられていたために、実際そうなつた。しかし、この後すぐ医学がこの事をひっくり返した事は言つまでもない。

「金太先輩？ そんなバレバレな事言つてもだめですよ。本当の事なんかお見通しですか？」

朗と薫は目を合わせて笑う。

そんな二人に金太は『ムツ』としている。

こんな感じで、いつも三人は楽しく過ごしていいる。朝の清清しい光の中、今、学校へとゆっくり歩み始めた。これからの、青春のページを刻むために。

「」でちょっと話を前後して、薫と一人の兄弟の馴れ初めについて語ろう。

時は、去年の十月。

薫がまだ、中学三年生の頃の話である。

これから受験まつただ中から、合格と言つ『バラ色の人生』への切符を手に入れようと頑張つてゐる最中のハズの頃の事。

この時期になると、大分肌寒く感じる。しかし、そんな事をものともしないという感じで多くの落葉樹は色とりどりに紅葉を楽しんでいた。

「……」、薰の母校『セントカタリナ女学校』でも例外ではなく、銀杏並木を歩くと辺り一面黄金色に……更に飴色の蝶が舞い降りては、行き来する者達の頭や、肩に止まって行く。

そんな中、どうやら三人の少女がやつて来るようだ。

しかしこの三人、何だか『イマイチ』霸気が感じられない。まだまだ、食べ盛り、育ち盛り、元気盛りだと言つのに……

そして、一人の少女がため息まじりに声を漏らした。

「ねえ、余りにも平凡だね。いくら受験生だって言つても、やつぱ、息抜きだって必要だと思うのよ……只でさえこう、女の子ばかりの学校で息もつまりそuddつていうのに……」

実はこの学校、都内でも有名な、エスカレーター式のお嬢様学校である。

そして、この銀杏並木はその名物。

その、銀杏並木から覗く事ができる放課後の運動場は、何処を見渡しても女の子ばかり。

「裕美もそう思う? 私もさあ、何かこう違うんだよなあ……なんて思うんだよね。確かに、今を頑張つて入試に挑んでこの学校を後にして、共学の高校に入れば良いのかもしれないな……なんて思うんだけど、でも、今のこの瞬間つて言う楽しみがないじゃない? 私はこの瞬間を楽しみたいんだなって思うんだよね!」

そうそう、一つ付け加えておきますが、この学校、エスカレーターと言つても小、中学生の間だけである。

「そこでさ、一つ提案が有るの! 来週の月曜日に学校をぼつてさあ、城東高校の文化祭に行こう!」

と、久美子は話を続ける。

いきなりのこの発言に、裕美と、そして薰の目が発言者の久美子に注がれた。

「久美子! ちょっと本気? 男子高だよ? バレたらヤバイつて……確かに、来年度から共学になるらしいけど……今年は、女の子は入れてくれないよ! ?」

思わず薰は言いよどむ。

それをすかさず久美子は制する。

「薰のお墓迺！シスターに聽かれたらよけいにヤバイでしょ！」

そう言われて、薰は初めて周りを見渡し、誰もいない事を確かめると、『ホツ』と肩をなで下ろす。

そんな薰をよそに、会話は続けられる。

「いいんじゃない？面白そう！行こう行こう！男子高最後の記念になるじゃない？ねえ、薰！」

どうやら、裕美は賛成のようである。

「……でもつ……私なら男装してもしなくつても男の子に見えるとは思うけど……」

薰は後の一人を見る。

「どう見積もつたって、あなた達は見えないよ……男の子に！」

そう、まずは久美子と呼ばれるこの利かん気な少女は、一見167の『タツパ』と、『ボーアイツシユ』な髪型で、後ろから見た限りでは男の子に見えなくはない。

しかし、『パツチリ』とした田もとと、愛らしい口元は、まるでフランス人形のようである。また、裕美にいたつては何処から見ても可愛らしい『ホワホワ』した感じの背の低い少女なのだ。今更だけど、良くこんなにタイプが違う三人で仲良くやれるもんだと思える程。

そう言ひ、薰はと言ひ、運動部が勧誘に来るくらい運動能力が抜群で、175の『タツパ』を持つた男顔負けの少女。髪の毛も『ボーアイツシユ』に刈り上げており、一見、細身である体は、実の所骨格もしつかりして、少し筋肉質。多分男の子だと言つても誰も疑うことは無いであろう。その上、ハスキーナ声は、変声期の男の子特有なもののように有る。

以前は、こんな自分を一時期凄く恨んだりもしたけれど、今では結構気に入つていたりする薰であつた。

「ブーッ！何よ薰つたらー！やつてみなくつちやわかんないじゃな

いよ～っ！まあ、とにかく、有言実行と行こうじゃありませんか？

……と、いうことで、月曜日の十時、城東高校の名物と言わわれて
いる『金卵の池』って所で待ち合わせ！判つた？

と、結局久美子が一方的に結論を出してしまったのである。

まあ、遅かれ早かれ、こういう事になる事は十分覚悟をしていた
薰ではあつた。今の今まで久美子の意志を曲げる事など適つたこと
などなかつたのであるのだから。

まあ、でもこういう所を憎めないのだから、久美子とはつづく
『カリスマ』的な人物であるのだなと思う薰である。

しかし、あのお堅い城東高校が、何故今更共学になるのであるの
か？そんな疑問を残しながら、薰達は『セントカタリナ女学校』を
後にしたのであつた。

#1 プロローグ（後書き）

途中、一部残酷表現がある作品です。

大丈夫な方のみご愛読頂ければ嬉しいです。
内容はRPGファンタジー。

主人公3人が成長していくお話。
宜しければ、ご覧下さいませ。

#2 出逢いそして出発

出逢いそして出発

手許の時計は十時半をさしていた。そしてここ『金卵の池』の前で薰は後の一人を待っていた。

この『金卵の池』は黄金色の卵の形をしている噴水である。卵の先端から吹き出している水の音が辺りに光を放ちながら飛び散っていた。

端から見ると不思議な光景である。その上、ネーミングセンスもどうかと思われた。

その前に薰は、兄である孝の制服を借りて、今この地で一人待つているのであった。

「全くあの一人つたら……時間にルーズなんだから。いつもの事に慣れつつも、さすがの薰もこの状態に少し怒りを感じ始めていた。

そんな折、後の裕美と久美子が、ゆっくりとした足取りで現れるのである。

「おーい、遅いぞ！」

なるべく、男の子風に装う薰。それに気付いた一人はやつと早足でこの地に辿り着いた。

「ごめん！服選ぶのに苦労したんだ！！」

久美子はあつけらかんとした態度で答える。青いジーパンに、上は質素なトレーナー姿。まあ、小綺麗な少年と言えばそういう見えなくもない。

「本当〜いつもごめんね？」

こちらは、裕美。Tシャツに、ジーンズの半ズボン。長い髪の毛は、一つに束ねられ、それを帽子で覆い隠している。ちょっと見、小学生の男の子のようだ。

「まあ、何とかばれないで済みそうだわ？」

はにかみながら薰は一人にそう言った。

「それじゃあ、参りますか？」

先を指し示すように久美子は校内を散策した。その校内は、何処を見ても男の子ばかり。中には、小さな子供を引き連れたお母さんが行き来していた。

「何処から行く？」

校門で配布されていた案内の紙を見ながら、三人は取りあえず近くの校舎の壁に寄り掛かりながら考えていた。

「ねえねえ、この『占いの館』ってのはどうかな？」

裕美が自分の好みを見つけ出し、その教室を指差した。

「裕美！あんたね……」

薰は呆れるかのように言つた。

「でも楽しそうじゃない？行つてみよつよー。」

久美子までもが賛成の声をあげる。

「でしょう？男の子が占いなんて普通しないよね？」

久美子はその上に言葉を重ねた。

「そ、う、よー、ど、ん、な、占、い、す、る、の、か、見、行、く、よ、ー。」

その裕美の一押しに薰は負けた。

「わかつたわよーで、見取り図からすると……」

自分の手許に有るその案内用紙を見ながら、薰は独り言のようになに咳いた。

「一年三組。この校舎の一階だよー！」

裕美が答える。その言葉にこの校舎に入る昇降口を見つけるために足を運んだ。

「このクラスみたいだよ？」

向かった教室の前。廊下にはり紙が出ている、『占いの館』と言う文字に注目する二人。中はいたつて静かそうだ。シーンと静まり返っている。

「どうする？中に入る？」

今更ながら何だか得体のしれないこの教室の雰囲気に圧倒される

かのように、三人は足を止めていた。

「来たんだから入ろうよ！」

その雰囲気を脱するかのように勢い良く足を進め始める久美子。

「ガラリツ」

その勢いのまま前方に有る『入り口はこちら』という張り紙に従つて入る三人。中は暗く、いくつかの個室を作つたかのような暗幕で仕切られていた。

「いらっしゃいませ」

と、一人の青年が声を掛けて來た。

「こちらは、水晶占い。カード占い。手相占い等いろいろと御用意させて頂いております。お三人様はどちらに入られますか？」

社交事例のように問いかけられて、

「それじゃ……わ、ボクはこちらの水晶占いに入らせて頂きます」
薰はその水晶占いと書かれた立て看板にライティングされている暗幕を指差した。

「それじゃ、オレはカード占い」

久美子も同じく指をさした。

「それじゃあー…ボクは、手相占いへ！」

胸を踊らせながら、裕美は言つ。

「それではお入り下さい」

三人はそれぞれ導かれるかのようにその暗幕内へと足を運んだのであつた。

暗幕の布を手で掴み薰は中に入つた。すると怪しきな白いベールを頭から被つた一人の青年が声を掛けて來た。

「いらっしゃいませ。今日初めてのお客さんですね……」

天井からぶら下がつてゐる豆電球には、赤いセロファンがかぶせられて、中はほんのり怪しき氣な雰囲氣づくりをしてゐるので、何だか不思議な感覚に襲われた。

その真下に透明な丸い水晶球がぼんやりと照らし出されてゐる。

その奥には一人の青年が立つていた。

「何を占つて欲しいですか？」

と、白いベールの青年に静かに問いかけられた。そう訊かれても、

元々興味の無かつた為どう答えれば良いか少し悩んだ薫は、

「これから運勢を占つて下さい」

漠然とした事しか言えなかつた。

「それは、身近に起じる事……と言つて下さいか？」

青年は問い合わせて来る。

「ええ、それで結構です」

「分かりました」

白いベールの奥の瞳で水晶を覗く青年。

「こんな占いで……何が分かるつて言つのかしら……」

薫はこんな占いを信じない気持ちを隠しつつ、その水晶を眺めていた。するとその水晶が揺らめいた。

「えつ？ 何？」

突然の事に薫は身を引いた。

「静かに……今、見えて来ます……」

青年は氣をその水晶に注ぎ込むように手の平を翳す。どんどんと、その水晶の中に一つの像が浮かび上がつた。

「何よ、これ？」

薫が立ち上がつた瞬間、碧白い光が辺りを包み込んだ。その像はハツキリと自分の姿を映し出していた。

「何で私がこんな格好してるのでよ！？」

と叫んだ瞬間、

「朗兄貴！ 念をとめる！…」

後ろの青年が近付き声を掛けた。しかし、それはすでに遅かつた。

碧白い光はこの暗幕をも覆い尽くす程光り輝いていたのである。

丸い水晶球は、何時の間にか正四面体の形に変わり、大きく膨張を始める。そして……この暗幕内を飲み込もうとするかの勢いで大きくなつていつた。

薫とこの暗幕に入つてゐる一人は、その水晶の中に身をゆだねる

かのように吸い込まれ、それから眩い光の中に身を投じたのである。

「一体、なんなのよー！」

その叫び声は虚しく、三人はこの場から姿を消していたのであ
つた。

異邦人

「おいつ、気がついたか！？」

意識が朦朧とする中、一人の青年が声を掛けて来た。それは、占いをする時後ろに控えていた先程の青年であった。

「ここは何処？」

薰は半身を起こしながら問いかける。

「どうやら……変な空間に飛ばされたらしい」

答える青年の後ろに、白いベールを被つた青年が腰を下ろして入るのが目に入った。

周りは微臭くその上鉄格子で囲まれていて、全く見知らない場所。「ところで、オレは片桐金太。君は？」まるでその異常な事に 관심を払わないで、自己紹介をして来る青年。

「ついでにあいつはオレの双児の兄で、朗つて言う」
すると、その白いベールをはずしながらその青年が一礼をする。
「私は、いえ、ボクは一之瀬薰……ところで、これはどうじつこと？」

薰は未だにこの状況がわからないと呟つたふうに問いかける。いや、全く判らないのであるが。

「オレ達にもわからない……異空間に飛ばされたらしいってことか」

朗と呼ばれる青年が、なんとも慣れているとでもいったふうに落ち着いて答える。

「そう、異空間。何でまたこんな事になつたんだか……ただ、君の運勢を占つただけなのに……」

ふて腐れたかのように金太と言つ青年が答える。

「なんだか牢獄のようだよ。ここは……」

辺りの石の壁や、鉄格子を眺めながら朗があつさつと叫ぶ。

「牢獄！？」

薰は驚きの表情で叫んだ。ただでさえ訳の分からぬ事に巻き込まれているのに、牢獄だなんて……〔冗談でも言つてもらいたくない。」兄貴！いつもながらだけど、こんな時にまで何でそんなに冷静でいられるんだよ！」

金太という人が朗と言つ人に詰め寄る。『うやうやしくの』一人の性格は全く異なつてゐる事は察しがついた。

「一体何が映つたんだ？あの水晶に！」

金太は朗の胸倉を驚掴みにして揺すりはじめた。

「ちょっと……こんな時に喧嘩なんてしないでよ！よけい混乱するじゃない！」

「このまだ見知らぬ一人を止めようと薰がその中に入る。ただでさえややこしいのに、これ以上困らせて欲しくは無い。

しかし、その答えとでも言つよう、

「ただ、君がこういう運命を担つていていたと言つ事なんだろう」

朗は薰に向かつて言い放つた。

「わ、ボクが？」

薰は水晶に映つた自らの姿を思い出してゐた。

白いローブを身に纏い、一本の杖を携えていた。

「そして、オレ達もその背後に関係する要因を持つていた者だとう事だ。な？金太？」

落ち着いて話をする朗。

「それじゃ、今回のこれも……オレ達の運命もこいつと何か関係があるつてことか？」

やつと察しがついたのか、金太はその朗の胸倉から手を引いた。

「この様子だと、きっと何かの罰を受けてこの部屋に入つたという筋書きなんだろ？」

朗は、静かに薰と金太を見ながら叫ぶ。

「罰だつて？何もしてないぞ。オレらー！」

薰にはこの二人が言つてゐる事が全くわからない。判るのは、この二人だけが知り得る何かが有るのだと言う事だけ。

そんな時、一人の男が『ガチャガチャ』という音を伴いながら牢獄の外にやつて來た。

「お前達に会いたいと王様の命が下つた。今この牢より解放してやる」

腰にぶら下げる鍵を取り出し『カチャカチャ』と鍵を開けている。

「王様？」

薰は問いかけた。

「そうだ。王様自らの御命礼だ。有り難く感謝しろ！」

野太い声が響く。

「誰が感謝なんかするもんか！」

心の中で薰は悪態をつくのであつた。

「良く参られた。勇者よ。頭を上げられよ」

数段上に座していいる王様と思われるだらうその男は、髪を長く伸ばし王冠を頭に頂いている。

事の成り行き上、跪いていいる三人はその王を見上げた。

「此度、西の一角で妖魔たちが蠢き始めたのだ。しかも、我が国の人間の王女を人質にしてな。それを退治して王女を連れ帰つて来て欲しいのだ。もちろん報酬は出るぞ！やつてくれるか？」

立派なひげを生やしていいる王様と言つものが、厳格に語りかけて來る。

「しかし、オレ達にはそんな大任をお受けする事は出来ませんが……」

朗は断るかのように語つた。

「いや？大任などでは無いはずだ。お前達にはその才がある。御神託を受けたのでな……必ずやりこなせるであらう。お主達であれば」

なおもしつこく語る王。

「御神託？」

不器用なのか、金太は不機嫌な顔つきで問い合わせ返した。

「我が国『ミルトン』御用達の巫女の力で占いをしたのだ。すると、お主達牢獄にいる者が、救世主。つまり、勇者の一行と判つたのだ」王は知り得る範囲の事を語る。

「救世主？ 勇者！？」

薫は驚いた表情で見上げた。とんでもない事になつてゐると思つたからである。

「巫女の占いは、今まで外れた事等ない。安心して西の一角『トリナ』へと旅立つてほしい」

すると、三人からの答えを聞く前に王は玉座を立ち上がつた。
「その前に装備が必要であるうへ、金は用意した。装備を怠るでないぞ。あと、幾人かの兵を貸してやる。その者達を連れてゆけ！」
そう言い残すと、果然と見上げてゐる三人には目もくれず、奥の聞へと足を向けてしまつたのである。

後に残された三人は呆然とこの成りゆきを見守つていた。
「今回は何だかRPGの世界に迷い込んだみたいだな……」

とは、金太の言葉であった。

石廊下に響く三人の足音。まだ出会つたばかりの三人は、静かに話しあつていた。

「まさしくそれだ……」

朗もそう思つたらしく頷く。

「で、誰が勇者な訳？」

薫は怖ず怖ずと問い合わせた。

「決まつてるだろ？ オレだよ！」

と、剣を持つてゐるかのような構えをする金太。今から武器屋を訪れようとする矢先にそんな事を言つてゐる。

「それじゃ、わ、ボクは魔法使い？」

あの水晶に映り込んだ時の自らの姿を思い浮かべながら薫は答える。

RPGならそれしかないだろ？

「さしつめオレは、賢者と言う所か……」

とは朗の言葉。感化されつつあるなと思った。

そんな話をしている所に、突如はだかる三人の男女。

「勇者様、我らをお連れ下さい！」

一人の男が言葉をかけてきた。そしてその中の一人が、「僕の名はレオナール。『』を武器に戦つことが出来ます。必ずや勇者様の力になりますよ」

ボーガンを背負つた、こぢりぱりした髪をした男が、未だ少年の成りで跪く。

「私はセリエ。武道家です。接近戦にはもつてこいの者です。以後お見知りおき下さいませ」

長い黒髪を、後ろで一つに束ねた女性が同じように跪く。

「最後になります。我はバルバス。忍者であります。影ながら死くす所存です。宜しくお頼み申します」

そして、いかにも忍者の格好をした者が、三人の足下に跪いたのであった。

「そんな事しなくて良いよ～それよりも、お互い頑張ろうぜ！」

不機嫌だったはずが、もうこの待遇を受け入れてしまつたかのように金太は、前に跪いている三人に声を掛ける。

「それでは、旅の用意が有りますのでこれにて失礼します」

挨拶程度の会話は途切れ、その三人はこの場を去つた。

「うひょー！ 気分良い～！」

いきなりはしゃぎ出す金太。薰にはこの者の気持ちが解かりづらかつたが、どこのつまりは、お祭り好きなのだと認識し始めていた。

「お前……もう少し気を引き締める。御神託か何かし知らないけど、こんな大役オレ達には荷が重いんだぞ！」

仕方が無いと朗が諫める。なるほど、薰には朗がストップバーとしての役回りのバランスの取れた兄弟なんだと気付いた。

「へーい。お兄様の言う通りですー！」

事の重大さに気がつきはじめる金太。素直な所もあるのだなと薰は思った。そこに、これから身の振り方を冷静に導えていた朗は、「取りあえず、武器や、防具をそろえよう。話はそれからだ」「そうだね。こうなつたら、当たつて碎けるしかないないよな……と、薰は心無しか不安な気持ちでそう言つておいた。

まず街に出た三人は、武器屋を探した。

この国『ミルトン』は、結構大きな街であるらしく立ち並ぶ店の数は碁盤目になつて軒を列ねている。

そして人も賑やかに道を往来していた。その人々の足取りは軽快だ。

「何処の武器屋が良いんだろうな？」

金太は辺りを見回す。至る所に武器屋はある。時に店の看板等を見て判断しているのだが、見当がつかない。

何度もか中に足を運んでみる。が、どの剣が良いのかさえ未だもつてわからない。

「きっと、これだつて思える代物が有るはずだよな……」

最後にはこの安直な考え。本当に前は『勇者』なのか?と聞いかけたくもなるもんだ。

幾度となく武器屋を訪れた。そして辿り着いたのは町外れの人通りの少ない、寂れたぼろい小屋。そこも武器屋であった。

「まさかこんな所に有るつて訳ないよな?」

一度足を止めたが踵を返して去るうとする金太……だったが、それを朗が止める。

「一応全部当たるんだろう? だったら入つて見ようじやないか?」

襟足を掴んでその金太を振り向かす。まるで、気儘な猫を扱つているみたいだ。

「ボクも、この中に入つて見てみたい!」

薰も賛成した。

「へえへえ。分かりましたよ!」

渋々と金太はその中に入る事にした。そして木であしらわれた階段を上り、中に入る三人。

「ごめん下さい！」

軽く声をかける。でも中は薄暗く静かであった。

「さすがに客はいらないな……」

そら見る。と言わんばかりに金太は言ひ。

壁に掛けられた無数の剣や斧、弓に杖。店の外観や内装とは打って変わつて武器に磨きが掛つている。

「意外だな……」

前言撤回とばかり咳く金太は、辺り一面を見渡した。すると、一本の剣に目を奪われたのである。それは、柄に簡素な装飾が施された鞘さえも無い剣。その剣先が神々しい光を放つてゐる。それに導かれるように金太は近寄つて、思わずその剣を手にとつていた。

「失礼ですがお客さま……その剣は非売品でござります……」

すると、突然背後からしゃがれた声が聞こえて來た。その声に驚いて振り返る三人。

「非売品？じやあ何でここに飾つてあるんだ？」

不思議に思つた金太は問い合わせた。

「申し訳有りませぬ……それは、この店代々に伝わる秘剣として、ここにいらっしゃるお客さまに觀賞用として眺めて頂きたいがタメに飾つている品物なのですよ」

暗闇から現れた者は、もう八十歳にもなろつかと思える皺くぢやの爺さんであつた。

「そうだつたんだ？この剣から光り輝くオーラみたいなのを感じたものだから……思わず手にとつてしまつた」と、詫びる金太。

「ほう……この剣先が見えると言うのですか？」

関心するかのように顎鬚に手を持つて行くその老人。

「ええ、神々しく光り輝いてる」

金太は見たままに、率直に答える。

「ふーむ……分かりました。それならば話は別です。『こちらの剣』『サラティン』をあなたに譲りましょ、……代金はいりませぬ。これがあるべき所に還るのですから……」

そういうと、金太の横に来てその剣の柄を取り上げて金太に手渡す。

「念を込めてみて下わい」

「えつ？」

言われたとおり、その剣に神経を集中させる。すると突如、その柄から鎧が飛び出し、その剣先は炎を上げて大きく燃え上がった。やはり……これは、貴方が持つに相応しい剣です。必ずや、貴方様を守ってくれるでしょう

「オレを……守る？」

その剣を持ったままその爺さんの話を聞いている金太。

「そうです。守護神、『サラマンダー』の庇護があなたを導く事でしょう」

「おい！でもこれって鞘はないの？危なくつてしまふがいい！」

「普段は鞘等必要有りません。貴方の目には剣先が見えるのかも知れませんが、我々には、その剣先を見る事は適わない……」

「それは……」

「心配御無用……貴方はその剣によつて傷付く事はございませんから」

と言つと、後の二人に探し物を訊く。

「オレと、この少年は杖を探してゐるのですが、良い杖はございませんか？」

朗が問い合わせた。

「でしたら、こちらの杖等は如何でしょうか？」

と、壁に立て掛けている一本の杖を差し出してくる。

「こちらは、『ウンディーネ』が守護する杖。『生命の杖』です。水の加護を受けることが出来ます」

一瞬、薰と朗を見比べた爺さんは、薰にその杖を手渡す。手に取

ると杖の頭の部分にパールの宝石が埋め込まれていた。

「これ……何だか手に馴染むよ」

薫はその杖を持った感触を言葉にした。不思議な感覚であった。まるで、今迄にこれを持った事があるかのような感触であった。

「こちらは、『シルフ』の守護を受けし杖。『翼の杖』風の守護を受けることが出来ます」

次に、朗にその杖を手渡す。同じように頭の部分にサファイアの宝石が埋め込められている。

「不思議だ……自分のために有る杖のようだ……」

朗は驚いた表情をして言葉を零していた。

薫と朗はその杖を『シゲシゲ』と眺めている。それを横目に、「なあ、爺さん……この辺でオレ達に合ひそつた武具屋って知らないか?」

さつそくとばかりに金太が訊く。それはまるで、この武器をあつらえた者に対する信用から来ていた。

「武具屋のう……わしがお勧め出来るのはここから、南に百ジャール行つた先を、東に五十ジャール程行つた所に有る『ノーラ』といふ武具屋を訪ねなされ。きっと良い武具が見つかるであろう?」

そう言つと、代金を払つた三人はこの店を後にした。

こうして、勧められた武具屋に立ち寄り、大金を叩いた三人は一度王宮へと足を運んだ。王宮では、身支度を終えた残り三人の仲間が、今か今かと待つていたのである。

「勇者様!身支度は整え終わりましたでしょ?」

小柄な少年、レオナールが金髪の短く切り揃えられた髪を揺さぶりながら金太の前に現れた。

「ああ、待たせたな。今から旅立つとしようか!」

「地図はここに用意致しております。次の宿場村『一ヶ』には、一日も有れば着く事でしょう。その分は用意しておきました」

大柄ではあるが、見目麗しい女性セリエはそう伝えた。

「ところで、馬は用意出来ているのですか？」

朗が尋ねる。

これからの中、どれだけの距離を歩く事になるか判らない。 そうならないためにも馬は必要であった。

「朗兄！ 馬なんてオレ乗れない！」

と、金太が口を挟もうとした時、

「勇者様が、馬が乗れないなんて言いつこなしだぜ？」

朗は金太の肩を情けない事を言つなと『ポンポン』と叩く。 しか

し、

「いえ、馬ではなく翼龍が居りますので、それに乗つて頂く事になつています」

バルバスが答える。

「ただし我は、地上から参りますが……」

とだけ付け加える。

「翼龍？」

考えが飛躍して、一瞬気が遠くなる思いの薰。 そんなものどうしろつて言つのか……

「お一人に一匹での航行となります」

レオナルドが答える。

「そいつって凶暴なのか？」

金太は思わず問い返す。馬さえ乗れないのに、翼龍なんて考える事すら出来ない。

「いえ、いたつて従順な生き物ですよ」

気にする事など無いと微笑みながら、セリエは言つ。その言葉に胸をなで下ろす三人。

「では、参りましょう……庭に既に用意は出来ています」

その言葉に、バルバスを除いた五人は足を向けた。

庭には、五匹の翼龍が木に繩で繋がれていた。首にはそれぞれの名前を指示するプレートが掛けられていた。

「翼龍との相性も有ります。御自分で選んで下さい。私達には自分の愛寵が居りますので……」

セリ工の言葉に、後の二羽から自らの翼龍を選ぶ二人。こうなればどうにでもなるだろ?と思つ事にした。そして選び終えると、

「それじゃあ、『一ヶ』の村まで、いざ!」

景気付けに勇者金太は、先導するかのように声を上げた。
「で……どつちだつけか?」

「先ずここでボケをかます金太であった。

ひたすら、西へと飛び続ける翼龍。

お日様が『サンサン』と照りつける雲一つない中、五人は、快調に翼龍を操つていた。それにしても吹き抜けてゆくこの風は、この天候下とても気持ちが良かつた。

途中、魔族とも思われる邪龍の群れをなぎ払い、先頭を勇者である金太が進んでゆく。

しつくりと手に馴染んだ剣は、金太の思うがままに操る事が出来た。その剣裁きは、守護精靈『サラマンダー』の加護の元、炎のような熱を放ち、一撃で邪龍を切り捨てた。

また、薫は補助魔法を、朗は攻撃魔法を、自らの庇護を受けし精靈の名に於いて上手く使いこなしていた。

不思議な事に、この世界では自分達が主役であるかのように上手く事が運ぶ。そんなこんなで、一度足留めを少々食らつたがいたつて快調に旅は続けていた。

薫は時々下を見下ろす。すると『ミルトン』の街程でかくはないが、小さい村が点々とあるのが分かる。

そして今、一つの山を越えた。

「おい、今越えた山のてっぺんに有る塔は何だ?」

金太はセリ工に問う。

「あの塔が有る所が、我が国『ミルトン』の国境を示す地点です。

山下にも、同じ物がいくつかそびえているのが分かるでしょ?」

隣に並んで語るセリエ。

「結構、広い範囲に及ぶ国なんだな」

今まで飛行していた距離を考えて、朗はその一人の真下に翼龍を走らせて来た。

「我が国は、この大陸で一番の広さを保つていての大國です。しかし最近、『トリナ』という蛮族国が支配下を増やしつつ有り、今では我が国に劣らないくらいの広さを保ち始めているのです」

その横を飛んでいたレオナールが、その話に首を突っ込んで来た。「姫君が捕らえられたと聞きましたが？」

情報を聞き逃さないようと薰がその話に割って入る。

「一週間前になりましょうか？突如『豊穣祭』に現れた、黒龍に跨つた黒い騎士が現れて、連れ去つていったのです。王はその事を嘆かれて、巫女達に祈祷を仰せつかつたそうです」

セリエは知つていることを全て答える。

「それで、オレ達が起用されたと言うのか……？」

「そうです。実の所、あなた方は、気絶したまま白い魔法陣に現れた方々なのです」

「白い魔法陣？でもボク達、牢屋に閉じ込められてたんだけど？」心外だとでも言う表情で、薰は口を挟む。あんな気持ちはもうごめんだとばかりに……

「ええ、勇者様方は祈祷の際、突如現れた異邦人としての扱いを受けたのです」

レオナールも、知つている限りの事を話す。

「だからって、牢屋なんかに押し込めなくつたって良いじゃないか？」

金太は少し腹を立てるかのようになんて答える。

「勇者様と分かっていれば、そのような事はなさらなかつた事でしょが……何分、時が時だつた為にそのような判断が下されたのでしょうか……」

ここは一先ず気持ちを落ち着けるようとセリエが付け加える。

「まあ、済んだ事をとやかく言つつもりはないが……何にせよオレ達が選ばれてここにやつて来た事には違いないのか」

朗はこの話に終止符を打つた。

もう、西の空が赤く染まり始めていた。

「今日は、この辺で休みますか?」

セリエは金太に話し掛ける。

「やうするか……」

金太達一行は、地上へと翼龍を導いたのである。

夢見る少女

夜は、昼間との気候とは打って変わつて肌寒かつた。東京とはかなり違う。夜空はやけに冴え渡つて、普段見る事が出来ない程の星の数を田の当たりにし、三人は神祕さに酔いしれていた。きつと、東京で見る星とは違つ星座が有るのであらう。そんな事を考えていた。

静かな海。

寄せては返えす波の音が辺りに響き渡つてゐるのみで、他には何も聽こえない。時折、石英の砂が擦れる音が『キコッ』と鳴るくらいだ。

三人は薪を囲み、しばしの夜に寝ずの番をしていた。バルバスと落ち合つたあと、一手に分かれて交代制で朝まで見張りをする事に決まった。

「静かだね。えつと……一之瀬薰くんだつたつけ？」

と、朗が話し掛けてくる。

「薰で良いです……その方が聞き慣れてますから」

薰は、今さらながらにそう答える。

「じゃあ、薰さん……訊いて良いかな？何故、今になつても男の子に成りすましてるの？」

問われて薰は驚きの余りに咳き込んだ。

「気付いてたんですか？」

薰が慌てて訊き返す。

「えつ？こいつが女？」

金太が身を乗り出す。

一瞬、顔を引きつらせた薰だったが、何事もなかつたかのように再び朗の方へと視線を流した。

「うん。初めて占いの館に入つて来た時には気付いていたんだ。何て言つのかな？勘なんだけど、女の子の匂いがしたというか……きっと、男子高に入るための変装だらうなと思ったんだ……にしても、もう、良いんじやないかな？」

クスリと朗は優しく笑つた。

「……すみません。私の友達と、変装して來たんです。来年度から、城東高校が共学になるつて聞いてたから、興味津々で行こうつて話になつて……実は、私の学校女子校なんです。だから、もしこの世界から抜け出す事が出来たら……と思うと、バレちゃ不味いかなとか思つて誤魔化してたんです」

伏し目がちに答える薫。バレたからと言つ照れじや無く、ただ芝居していた自身を恥じた。

「へえ……そうだつたんだ……でも、オレ達はそんな事ばらしたりはしないよ。安心してくれて良い。それより、危険な田に合つ事の方が心配なんだ」

語る朗に、薫は紳士的なイメージを抱いた。

「それだつたら、セリエさんだつて女性ですよ……」

「彼女はこの世界の人間で、鍛練を積んでいるはずだ。でも君は……薫さんはそうではないだろ？？」

もつともな意見であつた。

「気づかつて頂いて……本当に有り難うござります。だけどここにいる以上、そもそも言つてはいられないんじやないでしょ？危険とは隣り合わせ。この条件は、他の人たちと同じ事です」

そう答える薫の田は真剣だつた。

「朗兄、こいつの言つ事は筋が通つてるぜ。オレ達だつてここが何処でどうしてこうなつたのか未知の事なんだ。つまりは自分自身の事で頭が一杯つてことだ……これ以上の巻き添えなんてたまらないぞ？」

不謹慎にも自分の事ばかりの金太。

「金太。おまえなあ……もう少し広い心で接せられないのか？オレ

達にしてみれば、いつもの事なんだから……」

金太の頭を小突く。

「痛つ！」

金太は、小突かれた額を撫でながら、「じゃあ、兄貴！？ こいつの面倒見ろよ！ オレは知らないからな！」そう言つと、ふて腐れたかのようにつづ伏せにその場に寝つ転がつてしまつた。

「本当に……オレは知らないからな！」

念を押すと、番をする事も忘れたのか眠りに入る。

その様子を呆れながら、朗は見届けていた。そして、「薰さんの言い分は良く分かつた。だけど、なるべく一人では行動しないように……特に君の場合、攻撃魔法が使える訳ではないんだ。その点を考えておいて行動しなさい……分かつた？」

言い聞かせるように朗は薰に話し掛ける。

「はい、判りました。必ず生きて、私達の住む東京に戻るつもりで、これからは行動します……」

「判つてくれて嬉しいよ」

微笑む朗。その朗の顔をまじまじと眺めながら薰は問う。「所で、片桐さんは、こういう事に慣れてるんですか？」

「いひこと？」

「……あの、何だか、会話の中でそういうアンスの事を言われているから……」

そう、気になつてた事はそれだつた。

「ああ、金太とのやり取りでの事か…… なんだ、オレ達兄弟は、よく、こんな風に別の次元に迷い込む事があるんだ。探し物を要求されたり…… 探偵じみた事やつたり。今までいろいろな事をして来た…… でも、こんな風に危険な旅に他の誰かを巻き込んだ事はなかつたんだ。こんな事は初めてだ。だから、金太の奴、混乱してるんだと思う。悪い奴じやないんだ。許してやってね？」

困つた事なんだけど、それが金太というキャラクターなんだと告

げるようにならんの瞳は優しかった。

「いえ……その事は気にしてないですよ。ただ……何て言つか……こんな体験初めてだから、未だに信じられなくて……取りあえず足手纏いになる事だけは避けるようになります……」

ボソボソと話すべき事を話した後、薰は夜空を見上げた。満天に輝く星。その星の中に流れ星を見付けた。

どうか、生きて、みんな戻れますように……

その星に薰は祈つてみたのである。

#5 二ヶの村

二ヶの村

次の日、海沿いのこの場所を後にした六人は、次に目指す二ヶの村を約束し、この場を旅立つた。

航行は、何の変哲もないただの飛行に留まり、無事目的地へと辿り着く事が出来た。

「ここから、『トリナ』まで三日程掛ります……その『トリナ』は未知の領域で、中央に塔が有るそうです……田指すはその塔と言つ所でしようか？」

簡単にセリへは告げる。

「今日は、この『二ヶ』の村で一休みしましよう……宿は取りました。まだ日暮れまで時間が有ります。この後、自由行動にします」

「落ち合つたバルバスがそう金太に持ちかけた。

「そりやいいや。そうじょう……オレはここいら辺を探索に行くけど、お前達はどうする？」

好奇心旺盛な金太は他の者に訊く。集まつた六八はそれぞれ考えている事があるのか？

「私は、武器屋にちょっと顔を出して来ます。昨日の邪龍との戦いで、小剣を一部破損したようですね」

セリエはいう。

「僕は、この村に知人が住んでいるので、会いに行きたく思つてます」

レオナルドはちょっと照れながらそう言つ。

「ふーん。何？恋人か何かか？」

にやりと笑いながら急に腕組みをしてみせる金太。

「えつ……そ、そんなのとは違いますよ！」

赤面して慌てる辺り怪しいものだと思い、みんな笑いが込み上げる。

「私は、武具屋に用が有りますのでこれにて失礼致します」

そう言つと、素早く立ち去るバルバス。結局残つたのは、金太、朗、薰であった。

「つまりは、オレ達だけがお残りさんと言つ事か……じゃあ、有言実行！情報収集といきますか？」

金太は後の二人を連れだつて、人通りの有る所へと足を運んだ。少し歩くと、高い建物に挟まれた狭い通りに、上を見上げると洗濯物がなびいている道に出た。どうやら裏通りのようである。

「何だか、暗い通りだね……」

不安になつた薰はボソリと話し掛けた。

「高い建物に挟まれた所だから……」

朗がその言葉に太陽が射さないんだよと付け加えた。

さつきまで、太陽がさんさんと照つていたのに、ちょっと道を外れると、この有り様である。そんな小さい村であった。

すると、その通りの先に人の群れを見付けた。何やら一悶着があつたようである。その事にまるで野次馬のように駆け出す三人。

「どうやら、『トリナ』の野党が出たらしいぜ……」

と言つ言葉が幽かに耳に入つて來た。

「なんて惨い……」

「このような事するとは、絶対許せないな！」

そんな言葉がちらほら聽こえて來た。そんな中、金太は人込みを潜るかのように足をその中心へと運んだ。そして見たものは……

「げつ……」

一言漏らしその場に立ちすくんだ。後から來た二人もその場で目を伏せた。

一人の、籠を左腕に抱えた少女が、心臓を挟り取られるかのようにして、その場に倒れ込んでいた。その籠から一つ、りんごが転がり落ちているのが印象に残つた。

そして辺りにはそのりんごを踏み散らかした後が転々としていた。そして、滴る血が『ボタボタ』と腕に滴り落ちている様子から、そう時が経つていない事を知らしめていた。

「……これはひでー！」

金太はその少女を抱き起こすかのように、腕を取り上げた。その様子に朗も金太に手を貸す。

「おい！誰かこの子の事を知っている者はいないか？」

抱き上げた金太は周りで囁きあつてゐる者達に尋ねた。

「いや？オレは知らない……お前知ってるか？」

それを合図に、辺りは騒然とし始める。

「これからは外もおちおちと歩けないな……」

とか話している者達もいる中、

「あつ、もしかしたら……ほらつ！リーベルングさんとこの……」

一人の髪をはやした男が、その子の顔に心当たりが有る様子で前のめりに顔を突き出して來た。

「そのお宅は？」

朗が問う。

「この通りを、真直ぐ行つて、その角を東に百メーターほど行つた先に郵便屋が有るんだが、その角を右にまがつた先のお宅がそうだ」

「案内してくれるか？」

「いいぜ？案内してやる」

「ありがとう」

そう言うと、素早く金太は少女を抱きかかえて歩き始めた。

「すみません！どなたか、現場を御覧になつた方はいらっしゃいませんか？」

歩き出した金太の後を追い掛けながら、振り返り薫は問いかけた。しかし、誰一人として見た者はいなかつたと言つ。

ただ、この辺りを、脅かすようになつたこの出来事は、今日が初めてではないらしい。そして、決まって黒装束を身に纏つた、四つん這いの物陰を見た者がいるらしい……と言う事が判つた。

「『トライナ』の者……か」

と、朗は心で繰り返していた言葉を思わず口に出していた。

「『トライガリーベルングさん家だ。それじゃあこれで。ワシは用が有るから……』

道案内してくれたお爺さんに礼をして金太達は、その家のドアを叩いた。暫くすると、そのドアを開けて一人の女惟が顔を覗かせた。

「はい。どちらさま……」

と、言いかけた時、その顔は引きつるかのように変化した。

「オオ……何てこと……サラ…」

その女性は、金太が抱きかかえているその少女に覆いかぶさるよう

うに腕を伸ばして来た。

その様子に、

「どうしたんですか……叔母さん？」

その奥で聞き覚えの有る声が聴こえてきた。そしてテーブルに手を付き、腰を上げた少年を見て驚いた。

「レオナール？！」

金太が叫んでいた。

「あれっ？どうしたんですか。勇者様？」

何も知らないで歩いてこちらにやつて来るレオナール。そして、戸口に来た時その表情が険しいものに変わった。

「これは……」

眉間に皺がより、怒りと悲しみを露にするレオナール。わなわなと口元が震えている。

「先程この先の通りで発見したんだ。どうやら『トライナ』の野党がこの子を殺したらしい。この子を見知った者がこの家を教えてくれたんだ」

朗が落ち着いて説明した。

「まさか……レオナールくんの知り合いだとは……」

薰も沈んだ表情に変わった。一先ずこの戸口ではなんだ……と言

う事で家中に入つてこの子を寝かせるベッドまで足を踏み入れることになった。

「Jの子。サラが何をしたつて言ひの……Jの子は私の看病をしながら、りんごを売りに出かけたのよ…」

ベッドに寝かされたその、サラと言ひ子に覆いかぶさりながら泣きじやぐるその女性。

「残念な事です……」

朗は、御悔やみの言葉をのべる。

「まだ……小さい子なのに……」

その様子に、女性の涙にもらい泣きをして幽かに涙声の薰、たつた今まで穏やかな空気が流れていったであらう部屋に嗚咽が響いていた。

「レオナ ル……大丈夫か？」

朗がレオナールの肩に手を置く。その手にレオナールの手が重ねられ、

「すみません。賢者様……もう大丈夫です。それより、サラの事どうもありがとうございました……そのまま放置されている事になつていたらと思うと……」

背中を向けたまま涙声で語る。

「明日の葬儀までここに滞在して今日はお通夜に出て行け……その方が良いだろう？みんなにもこの事は伝えておいてやるから」

氣を利かせるかのように、金太が血まみれになつた服を身に纏つたままそう言い残す。

「いいえつーすぐにでも……『トリナ』に旅立ちましょー…そして、妹の……サラの仇を取ります！」

レオナールは決意したように顔を上げる。

「妹？」

朗が聞き返す、

「……小さい時、家の事情でこの地にサラは引き取られたんです…

…時々こうやって顔を覗きに来ていたんですが、このような事に遭

つて いるなんて……」

振り返るレオナールは近くの壁に歩いて行き、拳を叩き付けた。

その音が虚しく辺りに響く。

「気持ちは痛い程分かる……だけど、妹ならなおさら遺体をこのままにしておく訳には行かないだろう? 実の兄ならば、その自覚を持つて行動をしろよ」

金太は気持ちが判らない訳ではないがそう言つた。

「そうですよ。今はその方が大切ですよ?」

薰もレオナールの気持ちを思い遣つてそう言つ。

「敵討ちは、その後だ……」

そう言つ二人の顔を振り返り頷くレオナールは、泣きじゅくつている女性の側に寄り添つて、

「叔母さん。泣いていてももうサラは戻つて来ません…… 今夜はお通夜にしましょう。そして明日は葬儀です。それについては僕が全て手配しますから…… 叔父さんも戻られたら今後の事を話し合いましょう」

レオナールはその女性の小さな肩を抱き寄せながらそう語つた。

「勇者様。それではセリエさんやバルバスさんにお伝え下さい。必ず葬儀が終わり次第、旅立ちますからと……」

毅然と振る舞うレオナールを思い遣り、

「わかった。オレ達も今日の通夜と明日の葬儀に出るが、その時はみんな引き連れて来るけど良いか? それに、お前の事待つててやる…… そしたら、サラさんの敵討ちしに行こうな!」

金太は心の中で励ます。

「…………ありがとうございます!」

と、深々と頭を下げるレオナール。

「よせよー仲間だろ? それじゃあ、夜に来るから……」

そう言つと三人はこの家を後にした。

未だ聴こえる嗚咽。その声を背中に感じながら宿へと足を向け始めたのであった。

宿に戻った金太達は、事の成りゆきをセリエとバルバスに語つた。

「分かりました。そう言つ事なら、私達もお通夜に参列致します」

セリエもバルバスも賛成した。

「それにもお氣の毒ですね……」

セリエはレオナールの事を思いそう語つた。

「『トリナ』の輩の噂は、各地でも絶えません。我が辺りで来た街や村でもそう言う話を耳にして来ました。しかし、白昼堂々と行われたケースは初めてですな」

あからさまな攻撃がここに来て顕著に現れているとバルバスは静かに語る。

「各地でも被害が出ているのか？」

金太が事情を訊こうと問う。

「そうです。一律に伝えられているのは、『ミルトン』での王女をさらつて行つたような黒装束を身に纏つていると言つ事で、後はまるで亡靈のよくな騎士の群れだつたり、甲殻虫の巨大化した怪物だつたり……いろいろな説が取り上げられているようです。しかもその被害を受けた者は、全て、心の臓を奪い取られているとか」「化け物の一団つて事か？それとも異形な死に方に恐怖の余り……」

そう言う噂になっているのか？」

朗は手を額に持つて行きながら考えるかのようにそう答える。

「化け物だろうが、亡靈だろうが何だつて来いつてもんだ！何の罪もない者の命を易々と奪うなんて、許せないぜ！」

金太はここにきて熱くなつていた。

「今夜辺り、また出るかも知れませんね……レオナールのお通夜が終わつたら、一度この辺りを見回りましょう」

セリエは一案を出した。

「そうするか」

金太はその意見に同意し、この村の地図をテーブルに広げた。

「それじゃあ、この北方面をバルバスが担当してくれ

と指示を出す。

「それでは東方面は、私が受け持ちましょう」
進んで言うセリエ。

「気をつけるよ。オレは南方面を……」

金太が言う。

「それじゃ……西はオレと薫さんが受け持つ事にしよう」
朗がそう言ってくれた事で話は纏まつた。

「えつ？ 私達は一人ですか？」

薫は朗に問う。

「攻撃魔法が使えるまでは、オレと行動する事！ いいね？」
その言葉で、昨夜の事を思い出していた。

「そうですね……分かりました」
素直に薫は朗の言葉に従つた。

「それじゃそろそろお通夜に行きましょうか？」
時間を確認したセリエは問いかけた。

「こんな服装で申し訳ないけど、仕方ないか……」
先程付いた血を拭つた服を着たままで、その後の巡回の為に致

し方なく金太は、静かに席を立つ。

そして宿を後に五人はリーベルシングさん宅へと足を運んだ。

通夜は厳かに行われていた。

それは、ごく一部の近所の者や、金太連の参列で簡単な挨拶を交わすだけのものであつた。

そんな通夜も、程なくして終わつた頃。金太連は一度レオナールに声を掛ける。礼を言う彼を静かに受け入れその後会話のようになにか配せをして、家を出た。

「それじゃ、みんな。後の事は任せたぜ？」

金太のその一言で、四方に散つて行つた。

薫達が巡回したのは村の西の方。レオナールの妹、サラが殺害さ

れた地域であつた。

建ち並ぶ家々は、次々と寝静まるつと家の明かりが消されて行く。その家の間の暗い道を、目を見張りながら静かに巡回していた。

「この先の路地でしたよね？」

恐る恐る薰は朗に問いかける。

「そう。この道の突き当たりだつた」

あのサラの惨劇の様子を思い出していた。

「心臓を奪い取るなんて……」

考えただけでも鳥肌が立つ。

「奴らは、心臓を集めているのであるつか？それともそれを活力にしているのか？」

疑問だと、冷静沈着な朗は考えていた。

「もつと、敵の事を知つておく必要が有りますね？」

薰はそう思つた。

歩き続ける二人。もう人通りは無くなつていた。

きっと、夜中に出歩かないようにしているのである。……ただ、一人の足音だけが辺りに木靈していた。その後、二人はその路地を抜け、西南へと足を運ぶことにした。そこは、家並みの少ない広々とした道に、木が立ち並ぶ街道であつた。

「見かけませんね。この辺りにはいないのかも知れませんよ」

そんなことを薰が話しがけた時であつた。

一瞬『キラリ』と光る一本の針が、薰の横顔に飛んで来た。紙一重。その針を運良く交わした薰は、『カツーン』と、横に有る木に当るその針の音を聞き逃さなかつた。

「何者だ！？」

朗はその事に気付き、とつさに薰をかばうかのよつにその前に立ちふさがる。

「運が良かつたな？」

それは、枝から『スルスル』と降りて来る、黒装束に身を固めた一匹の蛇の怪物であつた。

「貴様が、サラさんを殺したのか！」

朗は、異形な姿のその怪物に向かつて驚く気配も無しにそう叫んでいた。

「ん？ サラ…… ああ、昼間の小娘か」

『チロチロ』と舌を覗かせながら、木に纏わり付くその怪物は答えた。

「片桐さん…… こいつが！」

薫は胸を掴まれる思いで声のトーンを落として叫んでいた。

「貴様達の狙いは何だ！ 人を傷つけそして何を願う…？」

その問いかけに、

「それを知つて、お前達に何の利益が有る？ それにしても、こんな夜更けにまた次の獲物に出会えるとは、オレはついているな。 我が主の良い手土産ができるというもの…」

瞬間再び『シユツ』と、口から針を飛ばして来る。それを朗は『翼の杖』で払い除ける。

「薫！ オレを補助してくれ！」

叫ぶと同時に杖に念を送る朗。

「我が守護精霊シルフの王よ。 我に力を貸して下さい！ 受けよ、ウンドトルネード！」

突然の竜巻きが、眩い光を伴い怪物田掛けて放たれた。 嘘る風の音。

「我が守護精霊ウンディーネの王よ！ 私に力を貸して下さい。 行け！ モーション、フォービット！」

薫は言われたとおり補助魔法で怪物の動きを封じ込める。

木の葉が舞い散る中、動きを封じ込められた怪物はその竜巻きの中もがいでいる。

次第にその竜巻きは勢力を強められて行き、終いには一本の木ごと吹き飛ばしていた。

軽々と舞い上がる怪物。 そこに、三本の矢が放たれた。 それは見事怪物に命中したのである。

「つぎや～！」

怪物のつめき声。そして血飛沫が辺りに飛び散つてくる。次第に風が静まり落ちて来る巨体の怪物の地響き。

「水臭いですよ。」こうこう事だつたら僕も呼んで欲しかつたですね！」

背後からレオナールがボーガンを抱えて薫達の元にやつて來た。

「！」

振り返る薫と朗。

「賢者様達が、帰り際何かを隠している事は気付いていました。申し訳なかつたのですが、後をつけさせて頂きましたよ」

レオナールは倒れ込んでいる怪物の真横に屈み込むように足をついた。

そして、その怪物の黒装束の懷から一つの七色に輝く透き通つた手の平サイズの珠を見付けて手に取るレオナール。

その珠の中には無数の脈打つ心の臓が閉じ込められていた。近寄つてそれを確認する薫と朗。

「これは……？」

呆然と眺める三人。

「こんな物の為に、サラは……」

その珠を叩き割らうとレオナールが行動を移した時、それを朗がレオナールの腕を掴んで止めた。

「レオナール……その珠を貸して下さい。そして、今一度、サラさんの所に戻りましょう……もしかしたら……」
と、何かを思いついたかのよう立上がつた。

「賢者様……？」

レオナールの手の平からその珠を取り上げた朗は、リーベルングさんの家へと足を運こぼうと思い立つていた。

傍らにはもう動かない怪物の死体が転がつている。

「片桐さん……？」

その不可思議な行動に、思わず薫も立ち上がり、後を追い掛けた

のである。

「薰さんの力で、サラさんを生き返らせる事ができるかも知れません」

リーベルングさん家のサラの遺体の安置されている部屋に上がり込んだ時、朗はそう言った。

「私の力で？」

薰は驚いたように問いかけた。そんな事出来るなんて考えた事もない。いや、出来るはず無いだろう？

「そう……君の魔法は補助するだけではなく、回復する力も兼ね備えてるはず……っていうのもこつ行った世界での常識なんですけどね？」

と、杖を指差してそう語る。

「でも……どうすれば良いんだか、判りません

薰はサラの遺体を眺めつつそう語った。

すると、朗は先程手にした珠を薰に手渡した。

「念じて御覧なさい……きっと上手くいきますよ」

朗は薰を励ました。朗と、レオナールはその場に立ちぬくしてその事の成りゆきを見守っている。

「分かりました……やってみます」

左手に珠を、そして、右手に杖を構え言われるまま薰は念じた。その念を遮らないように朗とレオナールは呼吸を鎮めていた。

「我が守護精霊ウンディーネの王よ！私に力を貸して下さい。そしてこの者にもう一度の生をお与え下さい！……リバイブ！」

そう唱える薰。すると、その左手の珠が輝き始めた。そして杖のパールにその珠の像が浮かび上がり、真っ直ぐにサラの遺体自掛けで一筋の光が射す。

「おお……」

『ドクンドクン』という鼓動が辺りを包んだ。そして遺体は青白い光に包まれて宙に浮かび上がっていた。

逆光の中、薫は瞳を閉じて念を送っていた。その光が收まるまで
ずっと念じ続ける薫。そして、命の脈動を感じた時眩かつた光は落
ち着いた。

ベッドに静かに降りて来るサラの身体。暫くすると静かな寝息が
聴こえて来る。

「ふう……」

その場にへたりこみ一息つく薫。その薫の肩に朗は手を掛けた。

「やつたな。薫？」

薫は、何時の間にか『さん』付けをしない朗に何となく親近感を
感じていた。

「これは……」

先程まで青白かったサラの顔に赤みがさしていた。

「お礼なんて良いですよ。それよりも精のつく物でも食べさせてあ
げて下さい。今まで遺体として放置されていたんですね。その事を考
えると体力の方が心配ですから」

薫が考えつつそう言つと、レオナールは台所へと足を運んだ。

疲れ切つた薫は近くの椅子に腰をかける。

「まさか出来るとは思つていませんでした。何と言つか……私には
癒しの術が使えるようですね？」

自らの両掌を見詰めながら朗に語りかけた。

「薫が持つてゐる『生命の杖』にはその力が有ると睨んだだけの事
はあつたな？」

朗は思つていた事を打ち明けた。しかし、薫の左手に有る珠はま
だ多くの魂の叫び声を止めない。

「この珠……どうしましようか？」

その珠を眺めながら薫は朗に問いかけた。

「それは薫が持つていなさい。もうこの世に戻る事が適わない魂。
何処の誰のものか分からぬ以上、生き返らせる事は適わない……
なら、これ以上の犠牲が出ない事を願いつつ、この先の旅を意識す
るのだよ？」

朗はそう薰に聞かせるように言った。

「そうですね……供養の為に、この私が持つておきます」

「そう言つ薰は、一つの決意を持つて朗にそう語つた。

「もう大丈夫ですよ……サラさんは生き返りました。良かつたですね。レオナール？」

薰はレオナールの手を取り微笑んでいた。

「ありがとうございます。何とお礼を言つて良いか……」

レオナールの瞳にうつすらと涙が滲んでいた。

こうして、リーベルングさんの家を後にした薰と朗は、宿屋に戻つた。暫くすると、金太と、セリエ、バルバスが戻つて来た。そして、事の経緯を話し合つたのである。

「どうか、レオナールの妹が生き返つたのか」安心と驚きが入り混じつたように金太はまとめた。

「明日には元気な姿を見せてくれるでしょう。それに、今日の所、レオナールは妹さんに付き添うらしいのでここには帰つて来れないのですが、明日予定通り次の街『アイン』へ旅立つ事ができるそうですよ」

一通りの事を話して聞かせた。

「どうか、身かつた。それにしても良くやつたな～薰！」

金太が一発背中を『バンッ』と叩く。一瞬、戸惑つた薰ではあつたが、

「自分に新しい力が有る事が判つて嬉しい限りですよ？」

薰は慢心の笑みを浮かべてそう言つた。

「ところで、他のみんなはどうだつた？」

話を四方に散つた後の事に戻した。

「オレの方は収穫無し……」

金太は、腕組みをしながらそう答えた。バルバスも然り。しかし、セリエは違つた。

「そう、お伝えしておかなければなりません。私の方では、一匹の

怪物を目撃しました」

沈着冷静に話すセリエ。

「やはり黒装束を纏つた蜘蛛の怪物を、何とか退治しました。そしてその輩がこの珠を持しておりました」

「一つの珠を取り出して後の五人に見せる。」

「これは……」

覗き込んだ薰と、朗はその珠を眺めて呟いた。そして、薰は懐に入れていたその同じ珠を取り出す。

「同じ物ですね……一体これは何でしょうか?」

それらの珠を見詰めながらセリエは呟く。

「どうやら、心の臓と思われますな……」

脈打つていてるその珠を覗き込みながらバルバスが答える。

「そうなんです。こうやって多くの魂をこの珠に封じ込め、怪物達を統治している。主に献上している物だと思われる物ですよ」

朗は、あの蛇の怪物が言つた事を思い出しながらそう答える。ざわめく一同。

「それは『トリナ』の主君だと思われます。この珠を献上する変わりに、安息を約束でもされているのでしょうか?」

できる範囲分かる事を薰は答える。

「しかし、何故狙われるのは全て女性なんでしょうね?」

バルバスは疑問を口にした。

「えつ?」

初めて判別した事項に薰は驚きの表情を見せる。

「実際、これまでの経緯を見ても少女だつたり、薰だつたり、セリエだつたりしてるじゃないか?」

金太はそうバルバスの意見に賛同する。

「確かに言われてみればそうですね。あの時も、オレではなく、確かに薰を狙つていた」

朗は思い出す風に視線を泳がせた。

「じゃあ『ミルトン』の王女様たちはもう……?」

考えたくは無いが、セリエは静かな絶望を感じていた。

「まだ、そうとは限らないわ……未知数の多い事だ。きっと、もつと何か重大な事があるのではないか？」

金太はそうであつて欲しくはない。という素振りでこの場をうち止めるかのように席を立ち上がった。

「今日はもう遅い。明日の準備をしておこう」

もう夜中である。宿屋の迷惑にならない内に、ここには各自部屋に戻る事を提案した。

「それじゃ、明日」

みんなが、金太の部屋を後にした。

明日はレオナルドと、この宿屋の裏で落ち合つ約束をしている。

今は休息の時を各自迎えていたのであつた。

#6 安住の地『アイン』

安住の地『アイン』

早朝、次の街『アイン』を目指し、まだ霧の掛つた村『ニケ』を六人は旅立つた。

上空は、少し肌寒い程に風が吹き抜けていくが、太陽が昇るにつれてそれも落ち着いて来ていた。

「『アイン』ってどんな街なんだろう。やはり、『トリナ』の傍にあるだけに危険な街と化しているんでしょうか?」

薰は、朗に話し掛けた。

「それはあり得るだろ? もしかすると、すでに支配下になつている可能性もある」

珍しく眉間に皺を寄せて朗は答える。

「いえ……そんな事はないと思われます。あの地は、聖地です。そう簡単には敵の手に落ちてはおりません」

セリエは、そう確信を持つて答える。

「何でそんなに自信を持つていられるんだい?」

その会話のやり取りに、セリエの側まで翼龍を近付けて金太は問う。

「あの地は、私の同胞が守っています。それゆえそう信じているのです」

「同胞って、あの、ルカ様ですか?」

見知っているかのように訊くレオナル。

「ルカ様とは?」

少し大きな声で朗が尋ねる。上空の風は山の谷間に向かう程強くなつて行き、会話が聞き取りづらくなつて来ていた。

「私の幼馴染みです。今は聖地『アイン』の地で修行しながら、街を守つているのです。ここ最近運絡が途絶えているのが心配ではあ

るのですが……便りがない事は逆に心配のない事と思つています」
本当は心配なのであります。少し上の空きみである。

「…………にも、こう霧が濃いいと、視界が見えづらくな……」

金太はほやいていた。

「この谷を越えた所に、『アイン』の街はあります……今暫く御辛抱下さい」

この確かに濃い霧を、目障りに感じてゐるのかセリエはそう言つた。しかし、何時になつてもその霧は晴れなかつた。

「変だな……この霧……ちつとも晴れないぞ？」

膨陶しいとばかりに金太は愚痴つていた。

その視界の奥に、黒い物体がちらりと見えた時、事の事態に気付いた。

「しまつた！これは罠です。高度を下げて下さい！」

事の次第を感じ取つたセリエは叫んでいた。しかし、事態は遅かつた。

「何これ……急に眠くなつて……」

薫は決第に頭の中が真つ白になつて来るのが分かつた。

「これは鱗粉。何で気付かなかつたのかしら……ダメ……この空気を吸つちゃ……」

セリエ自身にもやがて眠気が襲つ。そして、急降下して行く五体の翼龍の群れ。

「うわー！」

という叫び声とともに五人の意識は次第に消え失せて行つた。

「お田覚めですか？勇者の一行よ」

凛とした声で、目覚める五人。

「…………こには？」

まだ覚醒し切れないかのように薫は、手で田を擦りうと腕に力を入れようとした。が、両腕を上げるかのようにして、鎖で繋がれている事に気付き『ハツ』とした。

辺りを見回す。

湿った地下牢のような石壁に囲まれている事に気付き、五人はどうしたんだという風に狼狽していた、その時、「ここは『アイン』の街外れの地下です」と、澄んだ声が再び響いて来る。

「その声は……ルカ？」

聴き覚えのある声に、セリエが落ち着いて問いかけた。

「セリエ。お久しぶりね」

声は聴こえど、姿が見えない。

「あなた方には悪いのですが、ここで足止めをさせて頂きます」

「何故あなたがこんな事をするの？私達は先を急いでいるの！あなた耳にも既に『ミルトン』より伝令が届いているはずでしょう？」

セリエは問い返す。

「ええ。勿論聞いているわ。でも、あなた達に私の主、『リザード』様の邪魔はさせないわ」

「何を言っているの！もしかしてルカ……あなた……」

思いもよらない言葉に戸惑うセリエ。

「お察しの通りよ……私はあなた達の敵になつたの。私が愛する『リザード』様の御ために！」

そう言つた声が真上から聴こえて来るのがハッキリと分かつた時、五人は頭上を見上げた。そこには鉄格子越しに、一人の女性が、見下ろしていたのである。

「何故……愛するつて……じゃあ、ヴァイスは？あなた達結婚して……この地で一緒にいるはずじゃ……」

言葉をつまらせながらも、セリエは問いかけた。

「そんな人もいたわね……何となく覚えてるわ。そう言えば伝えてなかつたのね。彼、死んだわ。この地に訪れた『リザード』様の手に掛つて」

「えつ？」

セリエの顔が、凍り付いたかのように蒼白になつた。

「彼も本望だつたと思うわよ。『リザード』様の手に掛つて死ねたんだもの」

両腕を開いてみせるルカ。

「一体何を言つてるの……あなた達愛しあつてたじやないの！」

「愛してたわ……でも、私は強い人が好きなの。それに、人の物を手に入れたくなるくせがある。セリエ。あなたが、ヴァイスの事を愛してた事くらい知つていたわ。それに、ヴァイスも、あなたの事を……だから奪い取つた！本望だつたわ」

「ルカ……それじや……」

「私はセリエ、あなたがうらやましかつた。何でもそつなくこなし、私が欲しいと思つた物を手に入れて……そんなあなたが妬ましかつた。でも今は違う。私はあなたを見下ろす事ができる！」

「そういう飛ばすと、安堵するかのように息を吐ぐルカ。

「私があなた達二人を祝福した、その気持ちは嘘じやなかつたのよ！？私は、二人が幸せになれるんだつたらそれで良かつたの！それなのに、あなたはそんな事を考えていたの？嘘でしよう！？」

そんなルカの様子に、今までの思い出を否定されたようで……セリエの瞳に涙が浮かんでいた。

「嘘じやないわ。本心よ。これで分かつたでしよう？私はこんな人間なのよ！」

「う、嘘よ！」

『ジャラリ』と、鎖が擦れる音が鳴る。次から次へと思い出される光景。

同じ村で育ち。同じ学び場で武道を習い。そして、笑いあつたり泣いたり……

そんな事が脳裏を掠めている時、最後の言葉を掛けられ、絶望の縁から突き落とされたのである。

「これで『リザード』様の世が来るわ。あなた達はここで朽ち果てるの！？それじゃ。次会う時は、マーグメルド（死界）でね？」

と、言うと、高笑い声を残してルカはこの場から立ち去つた。

後には幽かに梟の鳴き声が聞こえていた。

『二ヶ』の村を後にしたバルバスは、この濃い霧の中、ひたすら後の五人との待ち合わせの街、『アイン』へと足を向けていた。見えづらい視界の中、空中を時々確かめている。飛び立つた、金太達の翼龍の足取りを確認していたのであった。

村を抜け、辺りは木の覆い茂った、森に出た。翼龍は、『アイン』の街への途中、渓谷に差し掛かっていた。

しかし、更に濃くなる霧にバルバスは、方角を誤らない事も念頭にただひたすら駆け抜け抜けて行く。

「ん？」

途中、霧が空から降り注がれて来る物だと気が付いて、足を止めた。

息苦しくなり、口を覆い隠している服の一部を触り、確認をする。「……これは……」

触った指先に付く粉。それに気付き、空を見上げる

先程まで軽快に飛び進んでいた翼龍の群れが、視界から消えていた。そして大きな蝶の群れを発見したのである。

「しまった。罠だ！」

そう思つた時、大きな音が五つと地響きが辺りに起つた。

「ちつ……」

森の中、辺りに舞う砂煙りと、木の葉の波。

今、金太達がその場所に落ちた事を知つたバルバスは無我夢中で駆け出したのであった。

その翼龍の落ちた地点に辿り着いたバルバスは、木の上からその様子を確認した。

金太達は、翼龍の背中に倒れている。

「御無事のようだ……」

足をその場へと運ぼうとした時、空から先程の大きな蝶の群れが

舞い降りて来たので、足を止め様子を伺つことにした。

「お前達よくやつた！あとは、我々が、この者達の始末をする。だから帰つて休め」

と、蝶の背中から降りて来た一人の女が指図をしてゐるのが目にはいった。

その者の指示で、蝶は飛び立つていく。

後に残つたその女と、配下であるのであらう男達は、翼龍の背中から金太達を引きずり降ろし、近くに潜めていた馬に仰向けにして担ぎ上げている。

「この倒れている翼龍は、近くの木にでもつなぎ止めておけ！」

またその女が指図する。どうやらこの女が首謀者だとバルバスは悟つた。

指示を承知したかのように、その通りに動く配下の者達。五人を全て馬に乗せ終わつた時、女を先頭にその馬と、配下の男達は移動し始めた。

「ん？あの女……どこかで見覚えが……」

あらゆる過去のデーターを引き出そうとバルバスはその馬が行く道を追いながら思考を巡らせていた。そして、

「あの女……確か、聖地『アイン』を守るべく派遣された。ルカ殿

……」

思い出したのである。聖なる地へ赴く者たちの中にこのルカがいたことを……

「これは、何か聖地『アイン』で起つてゐるな

確信したバルバスは、慎重に後をつけることにした。

既に霧は晴れ、ルカ達はさらに西へとひたすら進む。

途中、ルカが振り返る。

気付かれたのか……と、木陰に身を潜めるバルバスだったが、ただ振り返つただけに留まり、また先を急いでいくルカ達に、バルバスは再び後をつける。

それは夕方になつた今でも続いた。

そして空に、月が昇る頃、大きな洞窟に辿り着いた。そこで、ルカは馬から降り金太達を運び入れるように指示している。

「こんな所に、勇者様達を捕らえて何をする気だ……」

闇に潜み、バルバスは金太達を救い出す算段を考えていた。

「今飛び出す事は危険だ。勇者様達を連れ出す事はあの女、ルカがいては上手く事は運ばない……」

そう思い立つたバルバスは、ルカ達が静かにこの場所を立ち去つてくれる事を待っていた。

梟の鳴き声が辺のに聞こえ始める。既に、配下の者達は洞窟を出て来て、馬を走らせていた。

しかし、一向に、ルカは現れなかつた。暫く息潜めるように岩場の影でバルバスはその時を待ち望んでいた。そして、やつとルカが現れたのである。

何だか意氣消沈しているようで肩を落として出て来たルカは、洞窟の前で一度立ち止まつた。そして洞窟の穴を振り返つて、暫くの間立ち尽くしていた。

「何をやつているんだ？」

バルバスは洞窟内での事の成りゆきが分からぬまま、ルカが立ち去るのを待つていた。

五分程立ち尽くしていたルカは、やつと何かの決心をしたのであらうか？肩に力を入れ、その洞窟を後にして、馬に跨がりこの場を離れたのである。

その馬がバルバスの視界から消え去つた時、初めて行動を実行に移したのであつた。

洞窟の中は暗く、湿つぽい空気が辺りに充满していた。

足元は階段のようになつていて、松明を持ったバルバスは、足元を踏み外さないよう素早く駆け下りていく。途中、幾つもの鉄格子越しに、怪物が閉じ込められているのを目撃することとなる。

「何処にいるのだ……？」

こんな中に、閉じ込められているのかと考えると、よけいに心配になつて来る。

どんどんと足を進めて行く。そして、最下層に来た時、人の声を聴いたのであつた。

しかし辺りは石壁だけで何処にも人影が見られなかつた。そして、声が足元から聴こえて来るのに気付いた時、地面に少し変色した部分を見付け、その部分を取り払つた。

「勇者様！？」

鉄格子越しに鎖に繋がれた五人をバルバスは確認した。

「その声は、バルバス！？」

金太は驚いたような声で叫んでいた。

「今、お助け致します。暫くお待ち下さい」

バルバスはそう言つと、足元のその鉄格子を取り外そつと手を掛けた。

『ギシッ』という響きの音が木靈する重たいその鉄格子を持ち上げ、近くに立て掛けた。そして近くにあるロープを下に垂らし、『スルスル』と、下に降り立つたのである。

「お待たせしました」

礼儀良く跪くバルバス。

「よく此処が分かりましたね？」

一息つくかのように息を吐くと朗が問うた。

「勇者様達が、連れ去られている様子を確認しておりましたので…」

…遅れて申し訳ございません」

跪いたまま、バルバスは答えた。

「ありがとう……助かった。済まないが、この鎖をはずしたい、手を貸してくれ。オレの懷に、剣の柄が入つていて。それを取り出して、オレの右手に握らせててくれ」

その言葉に従い、バルバスは剣の柄を取り出し金太の右手に握らせた。すると、炎が辺り一面を浮き立たせ燃え上がつたのである。

金太は、その剣を自らの右腕に繋がれた鎖に向けて斬り付けた。するとその鎖が焼けただれて、『ジャラリ』と切り落とされたのである。それから自由になった右半身を使い、左腕の鎖も切り落とした。自由の身になった金太は他の四人の鎖を切り落として行つた。こうして自由の身となつた五人は、近くに立て掛けられた自らの武器を手に取つていたのである。

しかし、一人セリエはその行動をせず、ただ立ち尽くしている。その様子に気付いたバルバスは何かがここであつた事を悟つた。が、それによそに、

「ところで此処は？」

レオナルドがバルバスに問いかけた。

「『アイン』の近くの洞窟です。先程、ルカ様がこの地を離れ、『アイン』へと戻られたようですが」

簡潔にバルバスは、答えた。

「『アイン』へ？」

朗は聞いかける。

「何やら思いつめた御様子でした」

「……思いつめた？」

セリエの指先が『ピクリ』と動いた。

「ええ、この洞窟の入り口で何やら考え方をしていました」

淡々と答えるバルバス。その言葉にセリエ以外の四人は、顔を見

合わせて、先程までのセリエとルカのやり取りを思い起こしていた。

「……考え方？」

再び、『ポツリ』と問いかけるセリエ。

何やら、思いを巡らせているようである。

「ええ、そして、決心したかのような面持ちで、入り口を後にされました」

その時、

「あの莫迦！」

いきなりの大声に驚く五人。

「どうしたんです？セリエ殿！？」

事の成り行きを知らないバルバスは心配して声をかける。

「あれからどれだけ時間が経ってる？ルカの奴……死ぬ気だわ！」

セリエは、近くの岩壁に拳を叩き付けた。

『ガラガラ』と、崩れる音。

「どうしたんです？セリエさん！」

薰は、今さっきまでの事でセリエとどう接して良いか解らなかつたが、やつとここで、話し掛ける事が出来た。

「我が儘だとは承知しております。でも今すぐ、此処を離れましょう！そして、『アイン』の宮殿に急ぐのです！手後れになる前に！」

セリエは言うと、先程、バルバスが降りて来たロープに手を掛けた上り始めた。何事か分からぬが、その後に続く金太達。湿った階段も、ものともしない勢いで駆け上がるセリエ。そして、他の鉄格子さえも目に入らない様子で入り口の外に駆け出したのである。後に続いていた金太達は、バルバスの松明たいまつに導かれながら続いた。もう夜半である。真つ黒な空を星が覆いつくしていた。

やつと入り口の外に出た金太達は、外に出ていたセリエの背中を見ていた。

「『アイン』の宮殿はどっちなの？」

振り返る事さえしないで訊いて来るセリエに、

「その前に、一体何があなたをそうさせているのです？セリエ殿？」

何も知らないバルバスは、落ち着いた様子で問いかける。

「バルバス……」

金太は躊躇つたかのようすに声をかける。しかしそんな事を気にかけるな。という風に、セリエは話を切り出す。

「きっと今、この『アイン』の地に、私達の目的の敵『トリナ』の『リザード』とやらは来ているんだわ……そして、そいつを倒すために、ルカは……」

拳を握りしめてセリエは震えていた。

「死を覚悟して、オレ達抜きで戦いを挑もうとしている?」

事の次第を……セリエが言いかける後を繋いで、朗は言った。

「そう言つ事なら、急こうぜ!」

金太はセリエの背中に手を掛けて走り出す。

事を察したバルバスは、

「そう言つ事でしたら、急ぐ必要がありますな……こちらです」駆け出すバルバス。その後を追い掛けるように走り出す五人。

今、やつとセリエの心は正気に戻った。そして、竹馬の友の為にあのルカの言葉が嘘である事を確かめる為にこの場を立ち去ったのである。

そんな折、ここ聖地『アイン』の宮殿では何やら慌ただしく侍女達が動き回っている。

きりびやかなまでもどことなく落ち着いた広い部屋が幾つもある宮殿。しかし今その部屋の一番広い間で、黒装束の男が一人椅子に腰掛けている。顔は同じく黒いベールで覆い隠されて、見る事は適わない。

「『リザード』様。よくぞお越し下さいました」

正装をした一人の女が膝を付き、一礼をする。

「で、ルカ。我が欲している聖女の魂は見つかつたか?」

ゆつたりと構えた『リザード』が、話し掛ける。ゆつて、一メートルはあるであろう巨体。しかしその身体からは、お香を焚きしめた衣装を身に付けているのであろうか?香りが一瞬辺りに広がった。『申し訳ございません。捜してはいるものの、御期待に添える者は見つかりませんでした』

跪いていた姿勢から、その椅子に近づいて行くルカは、腰に下げている布袋から数十個の珠を取り出し『リザード』に献上しようと手の平に乗せていた。

「ふむ……どれも、聖女の魂ではないな……しかしこれは、我がコレクションとして頂いておこう」

その差し出された珠を椅子に座つたまま手に取り、懐へと忍ばせ
る。

「今宵は、『リザード』様が訪れた祝いの席を御用意致して居ります。御存分に楽しまれて行つて下さい」

立ち上がり、ルカは掌を叩く。すると、扉が開かれて一列に並んだ侍女達が部屋へと御馳走を持つて入つて来た。

一番始めに入つて来た侍女が、『リザード』の目の前に来ると、跪き、盆に乗つてゐる盃を差し出す。その腕は震えていた。その盃を受け取つた『リザード』を確認すると次の侍女が、盃に酒を注ぐ。そのナミナミと注がれた酒を、一気に飲み干す『リザード』。その様子にどよめく周りの者達。

「今宵はこの宴を大いに楽しむとするか、ルカよ、心配り有り難く受けるぞ!」

その言葉に、次々と注がれる酒。そして運ばれて来る食物。始めは恐る恐る近づいていた侍女達も、この機嫌の良い『リザード』の様子に少し打ち解けたのか、自然と振る舞えるようになつていて。その様子に安堵したルカは、その部屋を離れ、自室へと向かつた。そして、この日の為に用意していたのであろう剣を部屋の机の引き出しから取り出し、一度強く握りしめる。それから懐に収め、再び宴の席へと戻つたのである。

その頃、金太達一行は、『アイン』宮殿を手指し、ひたすら走つていた。

先頭は、道先案内をするバルバス。彼の、足音もしない足取りを後ろから手で追いながら、その後を付いて行く四人は、意識してか、足音は小さかつた。

月ももう、天空へとさしかかっていた。辺りは梟の鳴き声しか聽こえない。

しかし、事を急ぐ金太達は、ただひたすら『アイン』へと向かつていた。

早まるな！ルカ！

セリエはただ、ルカの事を思つていた。
あれだけ自分の事をけなし、失望させたルカ……しかしその心中
を考えると、セリエは自分自身が腹立たしかつた。

何故気付かなかつたのか……

そう、どれだけ心を痛めてあんな事が言えたであろうか？きっと、
はかりしれない程の気持ちを押さえての事であつたであろう。
堅く唇を噛んで、セリエは考えていた。
そんな折、

「此処を抜けると、『アイン』の街です」

静かな声でバルバスは言つた。少し坂になつた道を走り抜けると、
眼下にまだ、明かりが灯つた街が見渡せた。立ち止まる六人。

「いよいよだな！」

金太は気合いを入れる。

それに答えてレオナルドが、

「はい。勇者様！」

と、答える。そしてこの坂を一気に駆け下りる六人。それぞれの
心が今一つの心になる瞬間であった。

「どうですか？宴はお楽しみになられておいででしょうか？」「
部屋に戻つて来たルカは『リザード』に話し掛ける。

「おお、ルカか……そなたもこちらに来い！我が盃を受けよ……」
近くにいる侍女の手から一つの盃を取り上げて、ルカに手渡す。
「有り難き幸せです……」

『リザード』の手からルカの盃に酒が注がれた。

「そう言えば聞いておるぞ。勇者の一行を捕らえたとか？明日にで

もその勇者の顔を拝みたいのだが、良いか？」

誰の口からその噂を聴いたのであらうか？きっと、この宴の際に侍女の誰かが口にしたのであるつ事だけしか今では分からない。

『リザード』はかなり酔っているようだ。顔は依然として見る事は適わないが、少し陽気になつていて感じる。

「さすが、情報通ですね。確かに勇者の一行は、この私が掘らえました」

ルカは、謙遜するかのように答える。

「で、何処に捕らえているのだ？この我を倒そつと考へていてる莫迦な一行を見ておきたいものだ！」

高笑いする『リザード』。

「この街の外れの岩山に、閉じ込めて居ります。ぜひ御覧下さい。

そうですね、今夜、今からでも良いですよ？」

突然一步後ろにとびのき、ルカは懐から一本のダガーを取り出し、そして身構える。

ざわめく一同。今までドンチャン騒ぎしていた侍女達は、そのルカのいる場所から恐れおののいて辺りに散る。

「これはどういうつもりだ？ルカよ？」

ゆっくりと立ち上がる『リザード』。巨体が落ち着いていて異様な雰囲気をかもし出していた。

そのリザードの近くにいる侍女達も、一斉に身を引いた。こぼれる酒や、食料が辺りに散らばる。

「私も、武道家の端くれ。そして、この聖地『アイン』を守るべき者。その事はお分かりでしよう？」

覚悟を決めたルカの横顔から、静かな怒りが込み上げているのが辺りの侍女にも分かるくらい、今のルカは、ただならない表情をしていた。

「ふははは。武道家が剣を持つて、我に向かってくるとは笑止！しかも、後の事も考えずこれしきの酒で我を倒せるとでも思つておるのか？莫迦者め！」

左腰に下げている剣の柄を右手で掴み静かに引き抜く『リザード』。その剣は妖しく弧を描いた。

「どう思われようと、この地を。皆の者を守るために今まで私は働いて来た！しかし今日こそは、刺し違えてもお前を倒すぞ！覚悟は良いな？』『リザード』！』

気を集中させるルカ。辺りに磁場が出来たかのように、オーラが漂っているように周りの者達には感じられた。

「ふん。良いだろ？……今まで可愛がっていたお前だが、何時かの男のように、切り捨ててくれる。お前には、我がコレクションになる資格はないから思う存分、いたぶる事ができるわ！』

『リザード』の剣先から、黒い電磁波が『ビシビシ』という音を立てて放たれる。

「みんな、今すぐこの部屋から逃げろ！…そして、莫迦な私の事など忘れて、生き延びてくれ！」

ルカは無我夢中で叫んでいた。

そのルカの様子に、侍女達は一瞬戸惑つていたが、言われた通りこの部屋を後にした。

「薄情なものだな……？」

あざ笑うように『リザード』は語る。

「賢いの間違いだ！」

セリエの心中も他所についてに戦闘を仕掛けるルカであった。

富殿へと足を運んでいた金太達は、突如、勢い良く走り出して来る女の群れに気付き立ち止まつた。

「何の騒ぎだ？」

金太は驚きの余り、目をこらした。しかし、

「ついに始まつた！」

一番に駆け出すセリエの表情は、堅かつた。

「始まつた？つて……」

薰は、先をいくセリエの背中について行くように駆け出した。

「ルカつて言う女が、『リザード』に、戦いを挑んだんだろ？……
その様子に、気付いて朗が走り出す。

「急がないと！」

レオナールが、次に続く。

その横を、一番の俊足バルバスが追いこして行く。
「待てよ！ オレが一番先にいく！」

とてつもなく勘違いしている金太は、訳も分からずに後に続いた。
そして、逆行して来る人の群れの中、足止めを喰らいながら駆けて
行つた。そしてついに、宮殿の中へと足を運んだのである。

「ルカ！」

セリエは大声で呼び掛ける。次々と開いて行く部屋のドア。しかし、どこにもルカの姿はなかつた。そして、最奥の部屋のドアが開かれている事に気付き駆け込むセリエ。そして一步遅れて来る五人。その先に見たものは……心臓を一突きにされたルカが、黒ずくめの『リザード』によつて高く翻されていたのである。

「誰だ？ お前達は？」

深く鈍い声で問いかけられる。そして、床に叩き付けられるかの
ように降ろされたルカ。その反動で飛び散る血飛沫。
そして一目敵でルカに、駆け寄るセリエ。

「ルカ！」

セリエが必死の思いで抱き起こしている。

その様子を、虫けらが何かやつているとでも言つよう、妙な目
で眺めている『リザード』

「ルカ！ しつかりして！」

セリエは、ルカの頬を軽く叩く。ルカの口の端から今迄ルカの身
体で息づいて来たであろう血が流れ落ちている。

「ああ、セリエか……ドジつちゃつたよ」

やつとの事で、目を開いたルカは震んで来る視界の中セリエに語
りかけた。

「何でこんな無茶を？私達に一言でも言つてくれれば良いじゃない！？」

真剣な表情でルカを包み込むように抱くセリエ。

「『ごめんなさい』でも、私一人で、この件は始末したかったの…セリエ……あんな事言つて、『ごめんなさい』

もう、気力だけで保つているルカは瞳を閉じた。

「あれは全部嘘でしょう？本当に莫迦なんだから…」

そう言つとセリエは、ルカの頬を包むように手の平を当てた。目元に涙が溢れている。

「ふつ……それでも半分は嘘。でも半分は本当よ……でも、セリエの事、本当の親友だと思っているわ……それは嘘じゃないわ……」息が荒くなつて、ついにはうめき声を上げるルカに、

「待つて！私が、何とかするわ！」

薰がセリエの肩口から顔を覗かせた。

そして、『生命の杖』に、念を込める。すると、虹色の光が、ルカに向かつて注がれた。一時的にバリアのよつなドームがルカの身体を包み込む。

「これで、少しば楽になるはずよ……」

「ありがとうございます……」

セリエは、薰を見上げて礼をいった。そして、

「ルカ！今暫くそこで見守つていって！あとで全て聞くわ。こうなつたらこの決着は、私達がつける！」

セリエはそう言つと、勢い良く立ち上がつたのである。

入り口近くにいた金太達は、すでに、戦闘態勢に入つていた。

「お前が『リザード』か？それより名前は、訊いた者が先に答えるもんだぞ！」

自分の背丈よりも遥かに高い大男を見上げて、その『リザード』の前に歩みながら金太は言つ。

「それは失礼したかな？いかにも我は『リザード』だ。で、お前達は誰だ？」

血の付いた剣を拭いつつ『リザード』は改めて問い合わせてきた。

「オレ達か？ オレ達は……」

言いかけて、懐から剣を取り出し、念を込める。すると、柄から鎧が飛び出して業火の炎が『ブオッ』と燃え上がった。

「勇者の一行だ！」

その言葉に、それぞれが身構える。

「まつ……それは面白い……しかし、今のお前達で、我に立ち向かうとはちょっと圖に乗つてゐるのではないか？」

不気味な声で笑い『リザード』は答える。

「何言つていやがる！ 何なら試してみるか！？」

金太は巨体の『リザード』に向かつて突進し、剣を振り切る。それを軽く交わす『リザード』

「ちつ」

振り向きそのままもう一度切り掛かる。しかし虚しく剣は空を切る。

「我が守護精靈シルフの王よ！ 我に力を貸して下さい！ 受けよ！ ウィンドトルネード！」

突然の光の渦と竜巻きが辺りを取り巻いた。

「行け！」

レオナールがボーガンの矢を放つた。うねる風にまぎれて、矢は鋭く『リザード』を捕らえた。

しかし、その飛んで来る矢を左手一本でつかみ取ると『バキッ』と二つに折る。

「くそつ」

舌打ちするレオナール。

すると直ぐさま薫が、

「我が守護精靈ウンディーネの王よ！ 私に力を貸して下さい！ いけ！ モーションフォービット！」

補助魔法を仕掛けた。青白いリングが『リザード』の動きを封じるかのように飛んで行く。

「よし！」

セリエが飛び出し、相手の鳩尾に一発拳を入れる。その波動で地鳴りが鳴り響く。

「今、我に何かやつたか？」

しかし微動だにしない、『リザード』。一歩とび退くセリエ。

「莫迦な！？完璧に決ましたはず！？」

呆然と、立ち尽くす五人。

「我に任せよ！勇者殿！」

五粒の球を『リザード』に投げ付ける。そして、クナイを持って突進するバルバス。

球は床で弾け、煙りを上げる。バルバスは敵の心臓を目掛けてそのクナイを突き刺した。金太は、そのバルバスの背後に隠れて突進し『サラディン』を振りかぶる。そして突き刺した。確かに手ごたえは感じた。なのに、

「今日の所はこの辺で引き上げよう。余興は楽しかったぞ？しかし、まだまだ、力を付けていないな……」

『リザード』は煙幕から顔を覗かせる。

しかしその堂々とした姿は明らかに無傷のものであった。

「……なんだと……ジッ言つ事だ？確かに手ごたえが……」

と、金太は眩ぐ。

「手ごたえね……」これの事が？

よく見ると、懷に入れた珠が身替わりとなつて切られていた。

「これが無かつたら、さすがの我も危なかつたかもな……しかし、

運は実力のうち。次会う時を楽しみにしておるぞ！」

『リザード』は窓辺に立ちマントを翻そうとした時、一瞬立ち止まつた。

「ん？」

薰の姿に何かを感じたようである。ジッと薰を見ていた。

「お主、名は？」

視線の主が自分だと気付き、

「私の事？」

こんな時に何を聞くと言いたげに問い返す薫。

「そうだ……」

「私は、一ノ瀬薫。魔法使いよ……」

「ほつ……こんな所にもいたのか『聖女』よー勇者の一味にこよつとはな? 次会う時にはその魂確かに貰い受けたじょつーではさらばだ!」

一瞬の事であつた。薫の顎を捕らえしゃくじ上げるかのようにじてんづみの手で、その手を引っ越し立去つたのである。

後にはただ呆然と立ち尽くして居る六人がそこにいた。

「何がわいばだ。だ!」

『リザード』の立ち去るポーズをまねした後、腕組みをして壁に寄り掛かる金太。

「今戦えつてもんだけよなーくそつー!」

爪を噛みながらそんな負け惜しみを言つ辺り子供じみてい。

「いや……あのまま戦つても、きつとオレ達に勝ち田はなかつただうつ……」

朗は、そんな金太を冷静にじょつとぞう宥める。

「少し静かにして頂けませんか? 集中できません!…」

薫は『生命の枚』を、ルカの胸元に当てて念を込めて居る。未だ、虹色のドームを作つて居るその中で、ルカの治療を行つていたのであった。

「魔法使い様……私の命……もつぬかるのじょつへ…」

ルカは、そう薫に問いかけた。

実の所、もう手の施しようがなかつたのである。しかし薫は、何とかできる所まではやり遂げようと思つていた。

「じつとしていて……ルカさんの体力の消耗が激しくなるから……何時の間にか、涙声になつてしまつて居る自分に気付き、そんな自身が情けなくなる。

「あなた様が……『聖女様』だったのですね？」

と、につこり微笑むルカ。その頬はほんのり赤く染まっていた。

「さつきも言つていたようだけど……『聖女様』って一体？」

セリエはルカに問いかけた。その様子を見守る後の四人。

「『聖女様』の魂を身に付ける事が出来れば『不死の命』を……つまり『永遠の命』を手に入れる事ができる……という『リザード』の、受け売りの言葉ですが……その者をなすのです」

ルカは、吐く息を荒くしながら答える。

「永遠の命？」

朗は問いかけた。

「そう。『リザード』はその少女を探していたのです……そして、うつ……」

苦しそうな喘ぎ声。

「ルカ！」

ドームの外で、セリエは心配そうに呼び掛ける、

「……そして、その『聖女様』を捜しに、この聖地『アイン』に赴いた……しかし、始めのうちは、荒らし捲つっていた『リザード』に対し私達も抗戦していたのですが、我が夫、ヴァイスや、その他の大勢の聖者を殺した後、この地は荒れ果てたのです。そしてもう……対抗する力は残されていませんでした」

静かに聞き入る六人。

「そこで『リザード』に協力を惜しまず、その……『聖女様』を見つける事を条件に、この地を荒らさないようにして欲しい」ということで……協定が結ばれたのです」

『グフツ』と、血を吐くルカ。薰の表情は、これ以上は無理だと悟り必死で涙を耐えていた。

「『聖女様』は、強い心を持つた者……そして、処女でなくてはならない……だから、少女は特に狙われるのです……確か『トリナ』の『リザード』の本拠地には、その狙われた少女達の魂が多く補完されている……いわゆるコレクションなのですが……この先の道中、

もつと、厳しい試練が待つていると思われますが……十分気を付けて下さい……」

ついに、瞳を閉じるルカ。首を振る薰。

「セリエ……先にマーグメルドで待つているわ……でも早く来ちゃダメよ……」

うつすらと微笑んでがつくりと垂れた頭。

「ルカー！」

既に解き放たれたドームに、セリエは駆け込みルカを抱き起こそうとした。しかし、もう力のないルカの身体は『ダラリ』としている。それでもその顔の表情は、安らかな微笑みを携えていたのである。

「ルカーー！」

啜り泣くセリエの肩が悲しみで震えていた。

「……ごめんなさい」

薰は只一言そう言つと、その場を立ち上がり壁に寄り添つた。ついには、嗚咽が部屋中に響き渡る。

今、一つの魂が天に昇つて行くのを感じながら、セリエを残した後の五人はその部屋を後にした。

「許せない……自らの私欲の為に……」

自分自身の危険の事など忘れた薰の顔は、怒りの為に赤く染まつていた。

「でも、今のオレ達にはあいつを倒す事など適わない……」

朗はその薰の肩を抱きながらそう言つた。

「兄貴！だから、何故そんなに冷静に判断しようとするんだ！そんな事は覚悟の上のことだろう？だけどオレ達はやらなきゃいけないんだよ！」

金太は、そんな朗の肩を引き寄せて強引に振り向かせる。その朗の表情を見た時、金太は一步後ろに退いた。

「判つているさ。明日から修行を兼ねて、旅をする。急がなければ

ならない事は承知しているが、翼龍は使わない！足で、『トリナ』へと向かいますよ！」

朗は、普段見せない怒りを込めた表情でそう言い切った。

「そうなると、薫の身は特に気を付けなければならない……この意味は分かりますね？」

その言葉に、頷く金太。レオナール。バルバス。

「賢者様の言いたい事は分かります」

レオナールは同意する。

「きっと、これから旅は魔法使い様を狙つて来る輩が増える事でしょう」

バルバスも然り。

「もちろん薫も、その事を念頭に置いておいてもらいたい」

朗は、薫を振り向かせてそう言つ。

「片桐さん……」

その顔に戸惑いが見られた。

「わかったね？必ず、単独行動は慎む事！」

言い聞かせる朗にその真意を見つける事が出来た薫は、頷いた。

「私は早く攻撃魔法を身に付けます！そして誰の迷惑にもならないよう頑張ります！」

ハッキリとした元気な声で薫は言つ。

「明日は、ルカさんの御葬式をして、そして旅立ちましょう……」

朗はそう改めて言うと誰もいない宮殿の一室に足を運んだ。そして他のみんなもその部屋へと足を運んだ。

今でもまだ奥の間で嗚咽が聴こえる。

しかし間もなく、泣きつかれたのであるうか、その声も聴こえなくなつた。そしてこの日は、誰も寝つけない夜となつたのである。

#7 新たなる旅立ち

新たなる旅立ち

この日は、新たなる旅立ちにもかかわらず、朝から雨が『しとしと』と降っていた。

六人はルカの遺体を箱に詰め、小高い丘のある所まで運んだ。そこには、この聖地『アイン』を見渡す事ができる場所であった。『ルカ……出来れば、ヴァイスのいるお墓に葬つてあげたかっただけれど、あなたがいなくなつた今、それを訊ける者がいなくなつてしまつた……でも、あなたが守りつとしたこの地が一望出来る場所を選んだの。許してね』

粗末ながらも、その箱の中には、摘み取つて来たばかりの花が綺麗に優しくルカを包み込んでいた。

今、穴を掘つている金太と朗は降り注ぐ雨に打たれながら事を進めていた。そして、無事にルカを埋葬したのである。

『セリエ工には悪いけど……昨日決めた事なんだ。此処から先は、修行を兼ねて自らの足で『トリナ』へと向かう事にした』

金太ははつきりとそう告げた。

『承知致しました。勇者様』

セリエ工は、事の経緯を理解してそう答える。

『ところで、此処から足で進むとなると、どのくらいの日数が掛るのか？それを訊いておきたい』

朗は、念のために問う。

『そうですね。何事もなければ五日もあれば着く事でしょう……バルバス殿であれば、三日……』

セリエ工は、少し考える様子を見せて答える。

『五日か……分かった。バルバスには、先に進んでもらい、敵の本拠地を探つてもらおう。オレ達は、後を追う形を取る』

朗がその場を仕切る。

「承知致しました」

バルバスは直ちに、『トリナ』へと旅立った。

「ボク達も行きましょうか？」

レオナールはその姿に意欲を燃やしたのかそう先走る。「では行こう！途中、どんな敵に遭遇するか判らないが、絶対気を抜くなよ！」

金太が締めくくった。

そして更に西へと足を伸ばしたのである。

敵は案の定、薰を目掛けて襲い掛かつて来る者が後を立たなかつた。

それに対し、

「我が守護精霊ウンディーネの王よ！私に力を貸して下さい。行け！モーシショーンフォービット！」

薰が叫ぶ。

すると、敵の攻撃は一時的に止まる。

その間に、金太は『サラティン』を操り敵をなぎ払う。

また朗の攻撃魔法、レオナールの『セリエ』の拳が冴え渡つた。そんな感じでやつと『アイン』の街から進み出ようとしていた。その頃には雨も止んでいた。全てを洗い流してくれた雨。セリエはそう感じていた。

夕刻、渓谷に出る。

それは、この聖なる『アイン』の街を守るかのように、ある谷。その眼前に有る吊り橋に、五人は、

「こんな橋で、大丈夫か？」

余りにもお粗末な吊り橋に金太は、下を覗き込みながら呟いた。それもそのはず、なんとも目が眩むような高さであった。

「何をびくついてるんですか？片桐さん。もしかして、高所恐怖症

？」

薰は、面白半分にそんな金太に葉っぱをかけた。

「てやんてい！別に恐くなんてないぞ！ただ、みんながこの橋を無事渡る事ができるかなあ……なんて思つただけさ！」

慌ててそんな言い訳じみたことを囁つ。

「それじゃ。行きますか！」

先頭に立つたのは、意外にもレオナールであつた。歩く度に揺れる橋。心の中で『ひつ』と、金太はその様子を眺めていた。

「心配いりませんよ！？丈夫に出来ていますから！」

更にレオナールは、吊り橋のひもをわざと揺すつてみせる。

「はは……」

今にもへたり込みそうな金太をよそに、後の三人もその吊り橋に足を踏み入れた。仕方なく、その四人の後に続く金太。

そして、何だかんだで上手く渡り終える五人。その先には、鬱蒼と茂つた森への道が続いていた。いかにもこの先、怪物が潜んでいるであろうと思える。

覆い茂つた森の先に光は感じられない。鳥の鳴き声さえ聽こえなかつた。

「この先は全て『トリナ』の支配領と化していますね……」

セリエ工は静かにそう語つた。

「暗黒魔法が至る所に仕掛けられているな……」

朗は感じ取つたその事を口にする。

「暗黒魔法？」

薰は、その言葉の意味が分からなかつた。

「トランプに気を付けましょー！どう言つ物かは分かりませんが……」

朗はそう言つと、

「我が守護精霊シルフの王よ！我に力を貸して下さー！ライトーンングワンドー！」

そう叫ぶと杖のサファイアの宝石から放たれた眩い光が、更に暖かいそよ風を招き入れ辺りの暗さをなぎ払った。

「これで少しは安心して前に進めるでしょう？」

「そうは言つものの、安心し切つて進む事は出来ない。だけど、五人は前へと足を踏み出したのである。

「何？この、所々まだらに浮かんでる黒い物体は？」

薰は不思議そうにその物体に触るうとした。すると吸い込まれるように、その物体が大きくなる。それはまるで、ブラックホールのようであつた。その行動を垣間見た朗が、

「それに触るな！トラップだ！」

薰の肩を引き寄せて大声で叫ぶ。

間一髪その罠から逃れる事が出来た薰は、朗の前で尻餅をついていた。

「これが、トラップ？」

薰は未だ腰をぬかして、その場に腰を落ち着けている。

「ああ、間違つたら異次元へと運び込まれていただろう」

それを聴き、『ゾッ』とした薰は朗の背後へと『シャカシャカ』と移動した。

「脅かしつこ無しですよー片桐さん！」

身体の震えはまだ止まらない。

「冗談じゃないよ、薰。これからは無闇に何にでも手を触れるんじゃない！」

朗は肩越しに振り返り忠告らしく声を掛けた。

「また迷惑を掛けてしまいましたね……」

言われた事が判つて黙り込む薰。

「つたく……薰のドジさにはほどほど迷惑一ちゃんと後着いてこいよー朗兄貴もそんな奴の面倒を見なくちゃいけないんだから、大変だよな！？」

金太は腕組みをしながらそんな一人に声をかける。

「すみません……気付けてます」

『しゅん』とへこんだ薰は、そう言うと立ち上がり再び歩き出した。しかし行けども、行けども、黒い物体は増えるばかり。最後にはそそり立つた壁が立ちはだかつた。

「何だよ、この壁は！？」

その壁を前に、金太はあんぐりと口を開けていた。後の四人も、立ち尽くしている。

「朗兄貴！どうにか出来ないのか？これも何かの罠なんだろう？」

朗の方を振り向き、金太は言いよどむ。

その事で気を持ち直した朗は、『翼の杖』を握りしめ、その壁に向かつて一か八か、

「我が守護精霊シルフの王よ！我に力を貸して下さい！－！『ディバイドクラッシュ』！」

あらゆる光を引き集めて、杖は眩い光を放つ。その光が、白色に輝いた時壁に向かつて放出された。すると、黒い壁は『ドロドロ』と溶けていく。光が消えると、その先には再び続く道。

「やつた～！何とかなるもんだな！？」

金太とレオナールは手を取りながら喜びあつた。

『ホツ』と息を着く朗。

「目には目を。魔法には魔法だ……ところでバルバスは大丈夫なんだろうか？こんなに罠がたくさんあつたのでは身が保たないはずだ

……

先に続く道を見詰めて語る朗。

何処までも続くその道は、果てがないもののように感じていた五人であつた。

その頃バルバスは、この果てしもなく広がる森を駆けずり回つていた。

「おかしい……先程から同じ所を走つてゐる気がする……」

どうやら、この森の罠に掛つてゐるようであつた。

そして、ついには走る事を放棄した。

「迷路か？これも何かの術……」

そう判断したバルバスは近くの木に目印を残したクナイで傷を付けたのである。

そしてまた歩き始める。

「思った通りだ……同じ所を回っている」

確信したバルバスは木に登り、西がどちらであるのかを確認した。しかし、自分が進んで来た道は、間違いなく西であった。

この先、どうすれば良いのかを考えるために、はたまた体力を温存するために、取りあえずその場に腰を降ろして考え込みはじめたのである。

そんな時であつた。小さな光り輝く光が、バルバスの元に『フワフワ』と飛んで来たのである。

「おじさん、道に迷つた？」

そう言いながら『クスクス』と、笑う妖精が舞い込んで来たのであつた。

「おじさん……」

その言葉に『ピクリ』と反応する。実はまだ二十歳のバルバスであつた。自分では、見かけより若い気分でいたのであるから厄介である。

「この迷路から抜け出したいんじゃないの？」

可愛く小首をかしげて、バルバスを覗き込む人見知りしない妖精。

「その通りだ……しかし、抜け出す事など出来るのか？」

小刻みに揺れている羽を不思議そうに見詰めながら問い合わせた。

「うん。出来るよ！あたしに着いてくれば！」

光に包まれたその妖精は楽しそうに来た道を引き返して行く。それに着いて行くバルバス。

「こんな所に妖精など……何かの悪戯か？」

そんな事を考えながら。しかし他に方法が無くて早足でその妖精の後に着いて行った。すると、開けた道に出た。

「此処まで来ると、もう平氣だよ！」

にっこり笑う妖精。

「ここから、真直ぐ行つたら『トリナ』の街に出るから。それじゃあ！」

それだけ言うと飛び立とうとする。

「あつ。そうだった……」

何か言い忘れた事を思い出したかのように、妖精は空中で止まった。

「何だ？」

聞き返すバルバス。

「ある人に頼まれてやつて來たんだつたんだ、あたし……もし『リザード』に刃向かうつもりだつたら、この先にある泉のほとりの小屋に来て欲しい。つてさ！」

「ある人？」

「システィーナって言う女人の人。言えば分かるからつて言つてた」

「システィーナ……」

「それじゃあ、確かに伝えたからね！バイバイ、おじさん！」

そう言つと再び飛び立つ妖精。そこには果然と立ち尽くすバルバスがいた。

どれだけの時間が経つたであろうか？ 実際バルバスの心は揺れていた。

「生きていたのか……システィーナ……」

頭の中に蘇る、記憶。

それは、同じ村で生まれ育ち、同じ忍者として訓練を共にしていた仲間。

「しかし抜け忍として処罰されたのでは？」

そう抜け忍は、死を意味する。捷やぶりは重罪であつた。

「我が此処にいる事を知つてはどう言つ事なんだ？」

考えれば考える程、バルバスは途方に暮れることになる。

一瞬、自分の使命がなんであったのかを忘れかけたバルバスであ

つたが、何とか足を進める事が出来た。

「少し道草をする事になるが……顔を見せるくらいは勇者様もお許し下さるであろう……『トリナ』への道もこれで何とかなった訳だし

そう決心すると、バルバスシスティーナのいる泉のほとりへと駆け出していた。

#8 五人の『聖女』

五人の『聖女』

その頃の金太達は次から次に現れて来る怪物相手に苦戦していた。薫のモーションフォービットに対し、利き目がない怪物が出現していたのである。

「何なんだ……この怪物は！」

金太が切りにかかる。しかし、そのダメージはないに等しかった。巨大な火の玉のような物体。

同じ属性の金太の剣では切れ味が悪いというわけだ。

「このままでは、レオナールの弓だけが頼みだ！」

しかし、十本に一本当れば良いなんて……なんとも確率が悪い。

薫は苦しんでいた。

「水魔法が使えれば、こんな敵一網打尽に出来るのに…」

そう思えば思う程、薫は焦るだけであつた。

「薫！何とかしろよ！」

とは、金太も焼きが回つて來たらしい。そう簡単に魔法が思う通りに生み出せるなら苦労はしない。

「ちょっと待つてよ！何とか出来るくらいなら、もうやつてているわよ…」

そうやけっぱちに叫びながら、色々と悩んでいた。

そんな時、すぐ横に來た朗が、

「大丈夫！落ち着いてやれば、自ずと道は開かれるから…」と、援護してくれる。

「はい！」

少し心に余裕が出来た薫は、一心に心を落ち着かせる事に集中したのである。

『バタバタ』している周りをよそに、薫は無心になろうと努力する。

そして、ついに光を感じ取った。

「我が守護精靈ウンディーネの王よ！私に力を貸して下さい。行け！ウォータードライバー！」

スクリューのような水が、火の玉目掛け突き刺さる。

「ぐお！！！」

けたたましい妖魔の叫び声。鎮火して行く火の玉を金太達は見届けていた。蒸発する妖魔。ふわふわと氣体になつて、そして消えた。薫を振り返る一同。そして、

「やつたしやないか！なんだかわかんないけど、攻撃魔法使えるようになつたんじゃん！」

金太が、目を見開いてそう言つ。

「ほ……本當だ……」

薫は何が起こつたか分からないとでもこいつのように呟く。意外に簡単に出来てしまつた。

「これで、もつと応用を利かせれば、もつと多くの魔法が使えるようになるよ」

とは、朗の言葉。

「はい！」

元気よく素直に答える薫。

こうして一行に、新しい戦力が加わつたようである。

「さて、引き続いて、このままの調子で進もうぜ！」

はやし立てる金太。俄然とやる気になる一行。そして、この場を早足で歩いて行くのであつた。

バルバスが泉のほとりの小屋に着いたのは、夕暮れ時であつた。今までの道程とは違う、花畠が広がつてゐる。

「不思議だ、心が和む」

そんな事を考えながらバルバスは小屋の戸を叩いた。

「はい」

出て来たのは、まぎれもなくシスティーナであつた。

忍者の格好」にしてはいないが、長い黒髪を後ろで三つ編みしている。

「バルバス。よう」」そいらつしゃいました

出迎えるシステムイーナ。そして、

「あつ、おじさん來たの？」

システムイーナの肩口での時の妖精が『ヒヨコッ』と顔を出す。
「この子、ルーティーつていうのよ。今回の事は分かつていたわ。
だからルーティーを、あなたの元にやつたの」

システムイーナは何もかもお見通しのように語る。

「今回の事とは？」

「あなたが、『トリナ』を攻略するために、そしてあの『リザード』
を倒すためにやつて来るという事よ」

「何故、我だと？」

「それについては……とにかく此処ではなんだから、小屋の中に入
つて下さいな……それから話を致します」

そう言われ、バルバスは、言われた通りに、小屋の中に入つて行
つた。

簡素な部屋。しかし綺麗に片付けられていて可憐な花がテーブル
のまん中に飾られている。そのテーブルにある椅子に腰を掛け二
人は向き合つた。

「何から説明すれば良いかしら？」

システムイーナは、少し考え込むように肘を付く。

「私が、あの村を出た事から始めましょうか？」

一区切り付けてからシステムイーナは、語り始めた。

「私には、二人の妹が居たのは知っていたかしら？」

懐かしむようにバルバスに問いかける。

「ああ、確かに……魔法使いになるために村を出た子達だな？」

「そう。ティアラと、メイジ。あの村では珍しく魔法使いになるた
めに村を出たわ。そんなあの子たちは、よく手紙をくれたの……で
もある時を境に手紙をよこさなくなつた」

システィーナの顔に、不安な影が宿つた。

「それもそのはず。二人は『リザード』に寝返っていたの。私はそれを知り、この地に赴いた」

「それで、抜け忍になつたのか……」

「バルバスは、そんなシスティーナの顔色を窺つて判断した。しかし、よく生き延びて来れたな」

バルバスは続ける。

「ええ。この森を彷徨つてたら、ルーティーに助けられたのよ。この森のトラップにかかつて困つていた時に……」

システィーナの右肩に腰を掛けているルーティーが、頷く。
「だつて、お姉ちゃんの心が余りにも澄んでいたからいたたまれなかつたの！」

ルーティーは、満足気であつた。その様子に、かすかに微笑んでいるシスティーナ。話を続ける。

「そして、妹達の消息がこの地のどこかで失われている事が分かつたの。バルバス、申し訳ないんだけど、妹達には……手を出さないでいて欲しいの……」

黙つて聴き入るバルバス。

「こんな我が儘、許される事はないとは思うんだけれど……あの子達は、まだ判つていないので。『リザード』の命令で、動いているに過ぎない。私はそう確信しているわ」

「しかし、攻撃されたら……私は立ち向かわなければならぬ」

「そこを何とか……手荒な事は控えて欲しいの」

今まで肘を付いていた手を、『ギュッ』と握りしめて懇願する。

「しかし、何故、我だと判つたのだ？」

システィーナの言葉は一先ずおいて、バルバスは自分が不思議に思つてている事を問いかけた。

「勇者様の一行の事は、もう、街中に噂が流れているの。その中に、あなたがいる事は私の耳にも届いてきた」

この旅で派手な事はいつさいしていない。差し詰め、『リザード』

に会つた事くらいである。

ならば、噂をばらまいたのはそいつである事は確かなのだ。もしかしたら『聖女』としての薫の身を補完するために、怪物を送りだしている可能性だって高い。いや、『ミルトン』の方より伝令が回つてゐるのかもしれない。

「私は、戦力に加われない。この場を離れる訳には行かないの……この邪悪な森で、唯一、神聖な場所を崩されたくはないから……この泉は、『聖女』の泉と雖て、如何なる暗黒魔法も通じはしない」つまり、安らげる場所なのである。

「昔、この地に来た『聖女様』が使用して淨められたらしいの……ねえ、ルーティー？」

ルーティーを手の平に乗せて訊き返す。

「もう、なん百年経つかな？一人の『聖女様』が、一人でこの泉にやつて来たの。そしてあたし達を生んでくれた」

「『聖女様』が、お前達を？」

「そう、語り継がれているの……實際、生んだと言つには大袈裟かもしれないけれど。ルーティー達を造り出したの。『聖女様』はまるでこれから先の事を見通していたのかもしれない。この地を守るがごとく」

その『聖女』に、感謝の言葉を投げかけるよつてシステムイーナは遠い目をした。

「で、話を元に戻そう。システムイーナ。お前の気持ちは分かつた。しかし、我的任務を妨げるようであれば黙つて見過ごす事は出来ない。その事は肝に命じておいて欲しい。もちろん努力はする」バルバスは、システムイーナにそう言い残すと立ち上がつた。

しかし、システムイーナはそのバルバスを言葉で止めた。

「今日は遅いわ。今夜は、此処に泊まつて行きなさいな。部屋はこちらにもう一つあるの」

とその部屋の扉の前に足を向け、開く。

「いや……だが……」

焦るようにな躊躇するバルバス。

「そんなに遠慮する事はないわ。自由に使つてもいいって結構よ

「そう言われても……」

と、システィーナの顔を見る。

「ねつ？」

撫邪気に微笑んでいるシスティーナ。

その笑顔に吊られて、

「ありがとう。そうさせてもらおうか？」

なんとも言えない表情をするバルバス。

果たしてこんな事で上手く睡眠をとれるんだろうか……

バルバスの心の中は複雑であった。そんな事をよそに、部屋の就寝の準備をするシスティーナ。そして、そんなバルバスを横田に、ルーティーは、『クスクス』と笑っている。

妖精は、勘が鋭いのか？

ちょっと後ろめたさがあるバルバスであった。

その頃の金太達一行は、暗くなる道で話し合いを持っていた。
「今日の所はこれまでだな、それにしても、どのくらい進んだかな

？」

金太は道のまん中に『ドカツ』と腰を下ろし話を持ちかけた。

「そうですね、思ったより、進んだのではないでしようか？あと、三分の一はある所でしょう

セリエは冷静に判断してそう答える。

「それじゃあ、あと、二日はかかるのか？……それでも始めは、五日はかかると言っていたのだから良い方ではないかな？」

朗は付け足すよつに言った。

「そうですよーこの分だと僕達のレベルも結構上がっているハズです」

拳を振り上げて元気なレオナール。それが、みんなの心に負けないぞと闘志を燃やす。

「私も攻撃魔法が使えるようになつたし」

薫は自分自身に少しだけ自信が付いたようである。その顔は、輝くような笑みを浮かべていた。

「それじゃ、後の事は頼む。時間になつたら起こしてくれ」

金太は近くの木にもたれ掛かり、薄い、が温かい布をひつかぶる。そして睡眠を取る格好をしていた。

同じく朗と、薫も近くの木にもたれ掛かり始める。

今夜の番は、セリエとレオナールが先であった。

「おやすみなさい……」

静かに答えるセリエ。

ただ、『パチパチ』と、薪が燃える音だけが辺りに響いていた。

夜半、月も西に傾き始めた頃、交代の合図をレオナールと、セリエはする。

起き上がる三人。

「どうだ? 不審な事はなかつたか?」

金太の言葉に頷く一人。

「そうか。まあ何かあつた時は起こしてくれるだろ? とは思つけれど……それじゃ変わらうか?」

と薪の側に行く三人。

「それじゃあ、休ませて頂きます」

セリエは、金太がいた木にもたれ掛かる。レオナールも朗がいた木にもたれ掛かる。

その後、二人は疲れもあるのか、すぐに寝息を立てていた。

それを静かに見守る金太達。

『チラチラ』と揺らめく三人の影が、辺りに長く伸びていた。三人

は、お互に背にして、黙り込んでいた。何時襲つてくるか分からぬ敵を確認するためであつた。そんな時が暫く流れ、突然金太が話し始めた。

「敵。だんだんと強くなる一方だな……」

金太は、本当の所弱音を吐きたかったのである。自分の未熟さが、時々分かるからだ。

そんな金太に、

「お前だつてレベル上がつてゐるよ。そう思い悩むな……今はまだ成長期なんだ。オレ達は誰もが、目の前に立ちはだかる壁を乗り越えて行こうとしている。その段階は、果てしなく続くんだ……オレだって、もっとこう出来れば良いのについて悩む。だけど、そう簡単には、出来たりしない」

背中を向けたまま、朗はそう語つた。

「ほんと、悟つてんだな……」

金太は、天を仰ぐかのように手を伸ばした。そしてその手を頭の後ろで組む。

「片桐さん……」

薰は何か言つたが、言葉にならなかつた。

「なあ、薰。片桐さんじや、どつちを言つてるのか分からぬぜ！名前で呼べよ！」

と、突然の事に、驚く薰。

「えつ？」

振り返る薰。しかしすぐに元の姿勢に戻る。

「オレは金太。呼び捨てが嫌なら、先輩でも付けとけ！」

そう照れくさそうに言つと、首を『コキコキ』と鳴らしながら金太は薰を見た。

実の所、もう金太は、薰のことを認めていたのである。今までは、足手纏いにしか思つていなかつたのであるが、今はもうそつではない。その事が背中越しではあるが、気付いたから薰の心が揺れた。

「き……金太先輩」

ぎこちなくて、か細い震えるような声。

「ハツキリ腹から言葉に出す！」

「金太先輩！」

言葉に吊られて薰は、お腹から声を出した。

「よし！これからも宜しく頼むな！？」

金太は、落ち着いた態度でそう言った。

「それじゃ、オレも……朗先輩だな？」

にこやかに話に入り込む朗。

「はい。朗先輩！」

薰は嬉しかった。こんな事くらいかと思われるかもしれない。しかし、自分の事を必要としてくれる仲間がちゃんと此処にいる事。それが嬉しくてたまらなかつたのである。

こうして一日は過ぎていつた。

結局、眠る事が適わなかつたバルバスは、朝早くから身支度を始めた。

『ギーツ』と扉を開ける。

システムイーナは、未だ寝息を立てている。その布団の側にルーティーがちょっと腰を掛けている。

「あっ、おじさん。もう出かけるの？」

ヒラヒラと舞ながら問い合わせて来た。システムイーナに気付かれないうちに、出かけようとしていたのに、このルーティーに足止めをくうとは計算外だった。

「お前は寝なくて平気なのか？」

システムイーナを起こさないように静かに問いかける。

「うん。平気。もう十分の睡眠は取つたんだ。所でおじさん。あたしを連れて行く気はない？旅と一緒にしたいんだ！」

という言葉に驚くバルバス。

「お前が？じゃあシステムイーナを一人残して行く事になるぞ。それは……」

「その事は、もうシスティーナに話して了承を得ていいよ。だから後はおじさんの意志を訊きたかったんだ。一応、こんなあたしでもちょっとした戦力になるよ。この森を熟知しているし！？」

確かにしてくれた方が心強いのかもしれない。とバルバスは思つた。

「承知した。付いて来るのは許そう。ただし遅れるなよ！？」

そう言い付け加えると小屋の扉を開き外に出た。

外はまだ暗い。しかしバルバスは目的地の『トリナ』を目指し駆け出した。振り返る事もなく。

きっと、この戦いを終えてこの小屋に、二人の少女を連れて帰る事を誓いながら。

そう、システィーナの笑顔をもう一度見たかったのである。

太陽が昇り、五人は荷物を背負い先に続く道をただ見詰めた。

「さあ、出発だ！」

金太は、一步足を踏み出す。

結局昨日の夜は一匹も敵は現れなかつた。

そのため実の所拍子抜けな感じを覚えていた。しかしどんなに先に進んで行つても敵は現れない。

「なんだ？ この静けさは……」

朗は異様に静かなこの有り様に驚いていた。

「何故敵は出てこないのでしょうか？」

セリエは、歩きながら金太に問いかける。

「何がある……この先には」

勘つてやつなのかもしれない。嵐の前の静けさ。そう、そんな感じだ。

「取りあえず、進もう！」

五人は、足早にこの道を歩いていった。

しかし、太陽が真上にきても敵は現れなかつた。

そして、泉が見えて来たのである。その脇に、小さい小屋がある

のに気付いた薰が、

「あそこに小屋が！」

直ぐさま指をさした。周りに綺麗な花が広がるその中心にある小屋。

「こんな所に誰か住んでいるというのか？」

金太は意外な感じを隠さずにはいられなかつた。

「とりあえず、訪ねてみましょー！」

レオナールはそう持ちかけた。

五人は、その小屋を訪れる事に一致の答えを出し、そして小屋を目指し歩き始めた。

『コンコン』扉を叩く音が響く。

「ごめん下さい」

金太は、小屋の主の応答を待つたがその返事は返つてこなかつた。

「留守なのかな？」

薰が『ポソリ』と眩ぐ。

そんな時、後ろから透き通つた声がかかつた。

「あの？ 何かご用ですか？」

女性の声だつた。

気配を感じさせなかつたこの者に振り返る一同。

その表情は驚きの表情であつた。

「もしかして、勇者様？」

その聰明な瞳の女性はそう問いかけて來た。

「あ……はい…… そうですが

美人を目の前にして何だか落ち着かない金太。威儀が皆無だつたりもする。

「バルバスなら、早朝に『トリナ』へと旅立ちましたよ」

金太は静かな微笑みを返して来るその顔に見とれてしまつ。

「バルバス殿が此処を訪れたのですか？…… というよりバルバス殿をご存知なのですね？」

「あ、名乗るのが遅れました。私の名前は、システムイーナと申します。バルバスとは幼馴染みなのですよ」

そう言いながら薪を抱えて、小屋の扉へと近づいた。

その両手では開きづらいだろうと朗は、扉を開いてあげる。

「ありがとうございます」

一礼してその施しを受け入れていた。

「此処では何ですから中にお入り下さい」

システムイーナは、五人を中心に招き入れた。

狭い小屋の中、五人の人間が入ると、なおさら、狭く感じられた。椅子は二つしかないので、金太以外の者は立つて話を聞く事になつた。

「この辺りは怪物が出ないんですねね？」

金太は、姿勢を正して質問した。

「ええ、この辺りは『聖女の泉』がありますから、平和です」

「『聖女の泉』？」

関心をもつて問い合わせる金太。

「バルバスにも話した事なんですが、数百年もの昔、一人の『聖女様』がこの地の泉を訪問されたのです」

そう話し始めたシステムイーナの話に耳を傾ける金太達。

話が終わると、

「実は、此処にいる、薰という者が、『聖女』だと、『リザード』が言つたのです。では生まれ変わりなのでしょうか？」

金太は全ての事を聞き終わつた時、そう訊き返した。薰はその事で、システムイーナは『ビクリ』と、身構えた。

「『リザード』が？ そう言つたのですか？ ……ならばその可能性がありますね……」

意味ありげに、ちょっと暗い表情をしたシステムイーナ。

「バルバスには、黙つていたのですが、私達。つまり、私そして、二人の妹もその『聖女』の可能性があると、言われています……私は

は否定したのです。案の定、歳をとり、実際、私は違つた……

「『五人の聖女』……？しかし、歳をとつてとはどつていう事ですか

？」

金太は困惑していた。

「十五歳の誕生日になつた時、その証が出ると言われています
手の平を指し出してみせた。

「手の平に紋章が出るとされています。しかし、私の妹達はまだ十
五歳になつていません。あの子達のどちらかがそうだとすると……
身の危険が迫る事になる」

「つまり『リザード』の口論みに合ひの者を手中におさめる事になる
と言つて事ですね？」

朗が一步前に踏み出して訊き返した。

「私はあの子達に幸せになつて欲しい……しかし、ティアラも、メ
イジも、自分が『聖女』であつて欲しいと願い自ら、『リザード』
の元へと走つた。あの子達にとつて『聖女』は只の憧れなのです」
手の平で、顔を覆つた。

そんなシスティーナを思つて朗は薫に問いかける。

「薫？お前いくつだ？」

「……十四です」

戸惑いながら薫は『ボソリ』と答える。

「ほらつ、システィーナさん。ここにも、まだ、可能性がある者が
いますよ。そう嘆かないで下さい」

と、優しく朗は語りかけた。

顔を覆つた手の平を、静かに退けて、システィーナは薫の方を見
た。

「しかし、なんで、そんなにも候補がいるんだ？変な話だよな……
金太は腕組をしてのけ反る。

「分かりません……それも生かしている事事態、変な話なんです……
何かを待つていてる。そんな感じがします」

「待つててる？」

セリエが問いかけた。

「聖女の心の臓を食らひつ事で、永遠の命を得る事ができるといつ話はお聞きになつていますか？」

「はい、聞いてますよ。そのために、街中の少女の魂を献上してい る事も知っています」

実際妹の事があつたレオナールが答えた。

「そうです。しかし実際『聖女様』だと見込まれた者には手を出しえていな……つまり『聖女の証』がない事が盲点なんだと思ひます」

システィーナは、喉の奥から絞り出すように答える。

「しかし、殺されていった者たちの中にその『聖女』がいたらどうするんだ？ 困るのは、『リザード』自身では？」

「殺された者たちからは『リザード』のエネルギーに。そして、『聖女様』の特徴は、額にほくろがある者なのです……」

そういうとシスティーナは、前髪を手の平で分けた。

「あつ……」

驚く五人。

システィーナの額の中央には一つのほくろがあつた。

「薰……お前は？」

静かに問いかける金太。

すると短い前髪をかきあげてみせる薰。

その額には確かにほくろがあつた。

「ビンゴだな……」

金太は振り返つていたその身体をシスティーナの方に向ける。

「システィーナさんの妹さんにもほくろが？」

問いかける金太。

「そうです。私達三人とも同じ所にほくろがあるんです。そして、明日、妹達は十五歳になります……だからその前にこの地に呼び戻したいのです。これ以上『リザード』の思い通りにはさせたくない」

目を瞑るシスティーナ、それは紛れもなく、妹の事を思う姉の姿。

「しかし、私はこの場所を離れる事は出来ません。それは『聖女様』

の聖なる力が尽きて来たからです。前はもつと広範囲に渡つて抗力があつたのですが、もう大分その力も弱まつて来たのです。この地を守る事。それが私に架せられた『聖女様』からの神託なのです……勇者様?」

「はい」

「この事は、バルバスには言つていません。できれば秘密にしていて下さい……彼にこれ以上迷惑をかけたくないのです」

「承知致しました。この事は決して口外致しませんよ。安心して下さい」

微笑んでみせる金太。

「妹さん達は『リザード』側に付いているんですよね?」

薫が浮かび上がるかも知れない紋章を打ち消したくて手の平を『ぎゅつ』と握りしめながら問いかける。

「残念ながら……その通りです」

「ならこの先、私達の前にあらわれるはず!」
薫が勘を働かせて断言した。

「そう言う事になります」

伏し目がちにシステムイーナは語る。

「そうなつた時、必ず妹さん達の思いを改めさせるように努力してみますよ」

そう心に誓う薫。そして頷く一同。

「ありがとうございます」

システムイーナは頭を下げた。

「それじゃあ、この辺でおいとまさせて頂きます。バルバスに追い付く事は適わなくとも少しでも距離を近付けるために『ギシリ』と金太の腰をあげる音が響く。

「さて、締まつて行こうぜ!」

システムイーナに礼をし扉に向かつて歩き始める一同。

「安心して下さい。必ずあなたの元に、妹さん達は戻つて来てくれますから」

一同はさう言い残すと逆光の中、姿を消して行つた。

『トリナ』

「そろそろ『聖女様』の力が及ばない地域に入るよー・気合を入れて
いってよね！」

ルーティーは、バルバスの肩口から顔を覗かせて表情を変えた。
走り続けるこの道のりを振り返る。

始めは俊足のバルバスに、ついて行こうとしていたのだが、結局
体力が持たずルーティーは、ハルバスに捕まる形で休息に入った。
「どうか、分かった！」

バルバスの意識は、その先の事に集中し始めていた。

流れて行く景色。それは何だか、幻の中にいるようでもあった。
「この辺は、トラップが多いんだ。あたしが言う所を通つて！右、
四十五度！」

その言葉に、上手く交わして行くバルバス。目に見えない物達が、
今何かを伝えていたような気がした。

「そのまま真直ぐ！」

ルーティーは、確実な道をバルバスに伝える。

『ヒュンヒュン』と風を切る音が辺りに響いて行く。
時には木の上を通り抜けるため、木の葉が『カサカサ』と鳴る。
バルバスは、それでも走っていた。ただひたすら、自分の使命の為
に……

そんな時間が続いてゆき無事、開けた城下町へと辿り着いたので
ある。それは太陽が西に傾き、赤い夕日を身体に感じる頃であった。

城下町。

そこは、何処の街とも変わらない様相であった。

ただ違っていたのは、人が往来している訳ではなく、今まで出会

つたような怪物が道のまん中を何事もなく、平然と行き来していた光景がそこにあつたことである。

「なんだここは……」

そう咳きながらバルバスは、その怪物達の横を歩いていた。しかし襲つてこようとする物はいなかつたのである。

「此処が『トリナ』……妖魔達が生活する街だよ！」

ルーティーは、静かに語つた。バルバスはこの不自然きわまりない街を、観察するかのように見渡した。

「私は夢を見ているのか？」

ゆっくりとした足取りで進むバルバス。

「夢じやないよ。こいつやつて、毎日を過ごす妖魔達は、主、『リザード』の恩恵を得て、この地に住み着いてる……何の夢を見る事もなく。ただひたすら生きている」

ルーティーは、バルバスの身体から離れ、そして、解説を始めた。「本当の所、こいつらには何の悪意もないんだ……街に住み、自らの生活をするために必死なんだ。それは、人間のそれと変わることはないのは見ての通りだね」

道に並んでいる市場。そこで買い物をしている怪物達。

その姿は、人間のそれと変わらない。

「それでは、我達を襲つて来るあの怪物達は？」

バルバスは混乱していた。

「『リザード』の為に働く傭兵達だよ。それは、生きて行くための糧になる」

こんな姿の怪物達を見て、バルバスは自分達がしている事に疑問が生まれ始めていた。でも打ち消さなければならないと頭を振つた。

「取りあえず、『リザード』を倒す事が優先だ。ルーティー！『リザード』は、何処にいるんだ？」

歩く事をやめ近くの曲り角に入り込んだバルバスは、耳打ちするよつに問いかけた。

「『リザード』はこの先の『トリナ』の塔に住んでいるよ……乗り

込む気？」

「ああ、視察が我的使命だ！近くまで行き、どうこう構造になつて
いるか見なければ勇者様達に報告が出来ないからな」

腕組みをし、考え込んでいるバルバス。

「わかつたよ。それじゃ、近くまで行つてみよう……付き合つよー。」

そうして、この街の中核部へと足を運び始めたのである。ふと空を見上げた。すると、さつきまで夕暮れだった空は、夜を迎えるかのように、紫色に黄昏っていた。

「今夜が勝負だ……出来れば、ティアラと、メイジに出くわせればよいのだが……」

しかしバルバスの思惑は、無と化した。何処にも、それらしい人物には出くわさなかつたのである。

ただ、足をすすめるバルバス。そして賑やかになつて来た街。どうやら夜行性の怪物達が足しげく通り始めたようである。バルバスは、往来のまん中で立ちどまる。

その先には高い塔が聳えていた。

「バルバス、そろそろ、『トリナ』に着いた頃だろうな」

そのころ、金太達一行は、二日目の野営で休み始めていた。

「歩き始めてちょうど結界を抜けた所だ。安心できないから今日も、当番制で見張りをしような？」

「はい。今夜も私達が、先に番を致します」

食事を済ませたセリエが、そう言い出した。

「了解。それじゃ、何かあつたら起こしてくれ！」

「承知致しました」

すると、昨日と同じように金太達は、木にもたれて、仮眠を取りはじめる。

「なあ、セリエ。なんで『聖女様』はこの地に結界を張ったんだと思つ？」

寝息をたててゐる金太達をよそにレオナールがセリエに問い合わせ

た。

「システムイーナさんの言ひ通り、この地に起る事を予知してじゃないかと思うが、今となつては当の本人がいないから断言など出来ないな……」

考えるかのように膝の上に肘を置き答えるセリエ。

「予知ですか……それなら、『リザード』の事も予知してたのでしょうか？」

あぐらをかいたレオナールはそうしていくれたら良かつたのにとも言わんばかりにぶっきらぼうに答えた。

「その時は、まだ産まれていなかつたのであらうな……でも予兆はあつたのかもしない」

確かにそう言つ事だと、頷ける話ではある。

「『リザード』は人間なのでしょうか？」

ふとした疑問。

「私達が見た感じだと人間のよつた感じはするが……一足歩行をする人間の皮を被つた怪物なのかもしない」

「何処で産まれたのだろう？そして、何故、『聖女』の心の臓の事を知つたんだろう？」

レオナールは、次から次に感じていた事を吐き出した。

「そう言えば、疑問だわ……」

セリエは、その事にやつと氣付いたかのよつに手を打つた。

「そう。あいつ、『リザード』の存在事態不自然なんだよ……果たして、倒す事なんて出来るのでしょうか？」

「それは、骨身にしみてる……あの時の『リザード』の余裕ははかりしれないから」

互いに背を向けあつてゐる二人だが、その緊張感は、辺りを飲み込んでいる。

そんな時、衣が擦れる音と、笛の音が聞こえて來た。

その方向に立ち上がり、目を見張るレオナールとセリエ。

「何だ？この笛の音は！？」

レオナールが、そう言葉を発した時、地面が盛り上がった。

『ビシビシッ』と地面が後方からひび割れて来る。そのひび割れは道のまん中で断層を作っていた。

「うわっ！」

その揺れに堪えようとする一人。片足と片手を地面に付く。そして、気付いた時には金太と、薫がその断層の盛り上がった方にいた。引き裂かれた五人。

起きたての金太達は、事態をまだ把握できてなかつた。いや、レオナール達二人にも、この事態が読み取れなかつたのである。

「御機嫌如何ですか？勇者の一行よ！」

まだ、少女だと行つても申し分ない一人が暗闇の中から薄縁のロープをなびかせて現れたのである。目を見張る五人。

「もしかして、システムイーナさんの？」

薫が、揺れる地面に跪きながら問いかける。

「いかにも、私達はシステムイーナ姉さんの妹！」

「ティアラ！」

「メイジ！」

名乗りをあげる一人。しかし深く被つたロープのせいで、顔をおがむ事は出来なかつたが一人の姿はまさしく魔法使いのそれであつた。

そして笛を吹いていたのは、どうやらメイジのようである。

「メイジ！私がこちらの一人を片付けるから後の三人をお願いね！」ティアラはそう言付けると、未だ盛り上がりつてくる断層の金太と、薫に対峙した。

「わかつたわ。ティアラ！こつちは私に任せとちよつだい！」

頷くと朗、レオナール、セリエに対峙するメイジ。

十メートル程の高さにまで達する地割れが収まる頃、ティアラとメイジは魔法をくり出そつとお互いの杖と笛で、攻撃を始めたのである。

「ちよつと待つて！貴女達がしている事は人間を苦しめる事になつ

ているのよ！？」

戦う体制を何とかごめようと薫は、自らの体制を取り直して叫んでしまった。

それに対し、

「のんきに構えていると痛い目にあうわよ！クラシクオペレーシヨン！」

ティアラが地面に向かって杖を振り降ろす。すると金太と薫を裂くかのような地割れが起こる。

『グガガガガガガ…』凄い音が、周りに響く。とび退く金太と、薫。

「ちょっと待て！話を聞け！」

金太もまだ戦闘体制に入れずにいた。

「私達はシスティーナさんの意志もあつて、貴女達に危害を加える事は出来ないの！だから、今一度、話し合いを！」

薫は説得するかの勢いでまくしたてた。

「話し合い？そんなもの無用だわ！私達の心は決まっているの『リザード』様の世が、これから、新しい世界！」

ティアラは再び杖を地面に振り降ろした。

またしても裂ける地面。今にも、足場が崩れ落ちてしまいそうである。

「しようがない、薫！ここは、一度、戦闘体制に入れ！」

金太は、後ろに控えている薫を振り返り叫ぶ。

「でも！？」

薫は、どうしてもその気になれない。

「いいから、言う通りにしろ！このままではオレ達の足場がなくなる上に、任務の遂行も出来ない！」

その言葉に、金太が言わんとする事が頭の中に閃いた薫は、自らの杖を握りしめた。

「我が守護精霊ウンデイーネの王よ！私に力を貸して下さい。行け！モーションフォービット！！」

杖の真珠からティアラを束縛するためのリングが、放出される。

動きが止まるティアラ。

その瞬間、金太は懐から『サラティン』を取り出し、ティアラ田掛けで突っ込んだ。

崩れて行く足場を上手く交わしながら突進して行く金太は『サラティン』の柄でティアラのみぞおちに一発街撃を入れる。

「うつ！」

身体をくの字に曲げるティアラ。その身体は、前のめりになり金太の前に崩れ落ちた。

それを抱きとめる金太。

「こんな事で……」

ティアラは『ポツリ』とこぼしながらその意識は遠のいていったのである。

「金太先輩！こんな手荒いことして大丈夫なんですか！？」

駆け寄る薫。

金太の腕の中にいるティアラは静かに目を閉じていた。

「ああ手加減しているから大丈夫だよ。今の内に、朗達に合流しうー！」

「この高さの断層を下りるんですか！？」

薫は下を眺めながら答える。

「これくらい、大した事なんてない！氣は持ちようだ！荷物の中にロープがある。それを近くの木に巻き付ける！急げ！」

そう言うと金太はティアラを抱えて立ち上がった。

その様子を見届けてから薫は、荷物の中のロープを手繰り近くの木に巻き付けて、断層の下へと投げる。

「準備できました！」

「それじゃあ薫、先に行け！下りたら、オレが抱えて下りるティアラを受け止める！」

そう言わると金太の言葉に従つてその通りにした。

「ドジね。ティアラは……」

メイジは横笛を片手に聴いた。そして、口元にその笛を近付けて

メイジは吹ぐ。すると、辺りの木々がざわめき始めた。

「何だ？この得体のしれない妖気は！」

禍々しい気を感じ、朗が声を上げた。

まるで、木に足が生えたかのように一斉に動き始めたのである。そして小枝が、波打つかのように自在にくねり、朗達に向かつて攻撃し始めたのだった。

「賢者様！」

セリエが叫ぶ。朗は、その小枝に捕まり手足の自由を奪われていた。

「セリエ！何とかしろ…」

レオナールが叫ぶ。

「何とかって言つたつて、こうグニヤグニヤと動かれたら、この私の拳を持つても、攻撃ができない！レオナールお前が何とかしろ…」木に向かつて拳を打つセリエ。しかし、何の衝撃も与える事が適わない。

「こんなにいっぺんに来られたら、僕も太刀打ちできないよ…」ボウガンを構え、次から次へと矢を放つレオナール。しかし、イマイチ利き目がない。

そんな三人を覆い潰すかのごとく迫つて来る木。

「ざまーないわね！潰されておしまい…」

メイジが叫んだ時、木々を難ぎ払う炎が、辺り一面を襲つた。

「何！？」

その炎のある方向を見るメイジ。

「能書きはそこまでだ！今オレの手の中にティアラはいる…」

「このへんで諦めた方が身の為だわ！」

その金太の横に薫が立つてそう忠告する。

「ちつ……そんな子の事なんか、どうでも良いわ！私は私よ…」口の端を釣り上げながら答えるメイジ。

「何を言つているの！？あなたの姉妹でしょ…！」

こんな事を言うなんて思つてもいなかつた薫だった。

焼き払われた木々の中心にいる、レオナルドや、朗、セリエもそのメイジを冷たい目で眺めていた。

「姉妹だろうが、何だろうが、『聖女』として生き残ることができた方が強いのよ！」

ぐだらないと吐き捨てるメイジ。

「何故そんなに、『聖女』でありたいの？ そんなに、『リザード』が大事なの？」

薰は、血の繋がつている姉妹なのにまるで憎みあつて、敵であるかのようなこのメイジの態度に怒りに近いものを覚えた。

「あんたね？』『リザード』様が、もう一人の候補がいるって言つてたのは！？」

今度は、突然の敵意。それを感じ取つた薰は、

「何だかそんな事を言われたわ！ でも、私は、そんな事で『リザード』なんかの思い通りにはさせない。冗談じゃないわよ！」

薰は、手を広げ、ありつたけの感情をメイジにぶつけていた。

「『リザード』様は立派な方よ！ 私達人間。そして、妖魔を大切に思つて下さる方……あなた達はもつと『リザード』様の事を知らなければならぬのよ！」

何も迷いがない言葉を吐き捨てながら、一歩後ろに退くメイジ。

「『リザード』を？」

金太はティアラを抱えたまま問いかける。

「そうよ。良い機会だわ……教えてあげる。『リザード』様は『聖女様』と、『魔王』の間に産まれた子供なの。そして、この蝕まれた、世界を復興して下さる方！ そのために、この地を守られてそして、永遠の命を手に入れなければならぬ人物！」

笛を片手に握りしめているメイジはそう語つた。

「この世界を復興する……？」

先程まで手足の自由が効かなかつた朗が、片膝を付きながら、今立ち上がつた。

「そうよ！ 人間は妖魔の存在を否定し、そして、その世界を壊そう

としている…そんな事はさせないわ！」

「……」

これには黙り込むしかない五人。

今、誰もが思っている事。それは、何が正しいのか身からなくなつた……ということ。

「ティアラは、あんた達に譲るわ。好きにしたら良い。だけど私は、あんた達の手にかかるつもりはないわ！明日、私は『聖女』としての時を待つ事が先決なの！その前に、あんた達に会つて痛い目に合わせたかった……ただそれだけよ！」

捨て台詞を吐くと、笛を構え吹く。

その音色は透き通っていた。そして、メイジは闇に身を隠すように、姿を消して行つたのである。五人は、その方角を見詰めながら、呆然とただ立ち尽くしてしまつていた。

歩き続けて、もう何時間になるであろうか？バルバスは、天高く光つている月を眺めながらそんな事を考えていた。

「ほら、もうすぐだよ！」

肩口から顔を覗かせて、ルーティーは、囁きかける。

「ああ、分かつてる」

眼前に聳え立つ塔を見てバルバスは返事をした。

周りは、あの繁華街のような光景はなくなり、森が広がっている。その奥には、切り立つた細い崖のような一本道が幅二メーター有るか無いかという感じに塔の裾まで繋がつっていた。まるで、この塔は自然に隆起して出来上がつたもののように隆起して出来上がつた。

「さて、お手並みを拝見しようじやありませんか？どんなふうに乗り込むのかをじっくりと！」

ルーティーは面白そうにバルバスの肩口から飛び立つた。すると

『ボツ』と、淡い光が辺りに広がつた。

その細い道を歩き始めるバルバス。一步踏み間違えると、まつ逆さまに奈落の底に落ちて行つてしまつ。

そんな中バルバスは、ルーティーの先導を確實に見詰めながら集中していた。そして、その裾野に辿り着くとそこにはドアらしい一角が有る事に気が付いた。

しかし、そのドアは押しても引いても、開かれる事が無く、バルバスは、どうしたものかと考え始める。

よく見ると、岩肌に何かの機類が有る事に気が付き、

「おじさん。これ……何か有るんじゃないかな？」

ルーティーの灰かな光で照らし出すその機類は、四角くて、薄つぺらいものであつた。

「あのな……おじさんじゃなくて、お兄さん！もしくは、バルバス。そう呼んではくれまいか？」

いい加減『力チン』と来たバルバスはついに本音を明らかにした。そんな時、後ろから足音が聞こえて来る事に気が付いた。ヤバイと判断したバルバスは、塔の周りに繋がる道へと足を伸ばした。そして、ルーティーを自らの懷へと忍ばせる。

『モゴモゴ』と何かを言つてゐるルーティーであつたが、それを押さえ付けた。

「静かにしろ！何者かがやつて來た！！」

小声で語りかけるバルバス。

「どうだ？ 守備は？」

その姿なき声が辺りに聞こえて來た。

「守備は上々！十個の魂を手に入れて來たぜ！」

もう一人のその者が語る。

どうやら『リザード』への献上品を持つて來た者達であるようだ。

「へつ！ そんなものか、オレは二十個だぜ！」

「何！？ 負けた……」

だんだん姿が明るみになつて來る。とかげを大きくした姿の一足歩行の怪物であつた。その一匹が、ドアの所にやつて來る。そして先程の四角い機類の所に手の平を当てた。

しばらくすると何やら声が聞こえてドアが開かれたのである。そ

の開かれたドアは、一匹の怪物が通り抜けると程なく閉まった。

「あの装置が認識するのか……」

事の次第が分かつたバルバスは、静かになつたそのドアの方へと足を向ける。

そして見上げるバルバス。

「しかし、掌紋を得るにはどうすれば良いのか……次の獲物を生け捕るか……」

そう考えたバルバスは暫くその場に待機をした。

しかし、このドアにやつて来る獲物はいない。

それでも待ち続けているバルバス。今では眠さを通り越して頭は冴え渡つていた。

「おじさん……」

懐からピョコッと顔を出すルーティー。

「……」

「わかつたよ」バルバスさん！

「何だ？」

「やつて来る獲物より、出て来る獲物を待つた方が、得策だと思つんだけど？」

この事の成りゆきを見ていたルーティーは、助言のつもりでそう言つた。

「……その方が早いかもな」

一理あると気持ちを新たにするバルバス。

「すり変わる。か……」

その考えに及んで、ドアが開く瞬間を待ち構える。月は、もう、西へと沈みかけるそんな明け方であつた。

『シヨン』と開いた、ドア。その瞬間をバルバスは見逃さなかつた。瞬時に怪物のみぞおちに一発食らわせると、倒れかかる怪物を、片手に抱き近くの茂みに隠す。

そして変化の術を使い、その怪物の姿を模して、再びドアの前へと足を進める。

「でな……」

と、語りかけて来るもう一匹の怪物。バルバスと入れ代わった事に気付かないその怪物に話をあわせるように、『うう』
「何だ?……つと悪い、忘れ物して来たんだ。先帰つてくれないかな?」

立ち止まり、バルバスはその怪物に言葉を返す。

「なんだ?忘れ物?そんな物したか?」

ちょっと訝しげに問い合わせて来るその怪物。

「そななんだ……悪いけど待つてなくて良いから先帰れよーすぐ済むから!」

未だ不思議そうな表情を見せている怪物であつたが、

「判つた……んじゃ、先帰つてるからな」

振り返つたその身体を再び戻る方に向ける怪物は、『ドスドス』
といふ音を残して立ち去つていった。

「やるじゃん!?」

肩に乗つているルーティーは、この一部始終を見て喜んでいる。その様子に『ホッ』と肩をなで下ろすバルバスは再び、ドアの前へと足を伸ばす。

四角い機類。そこに手の平を当てる。すると、

『確認致しました。中にお入り下さい』

という機械的な言葉が流れて来て静かにドアは開かれたのである。

中に入ると中央に柱のような筋膜が立ちはだかりその周りに階段が螺旋状に連なつてゐる。

「下に行つてみよう」

バルバスはそう小声でルーティーに囁く。それはきっと上に繋がる階段は、『リザード』がいる部屋への道だと思つたからであった。

『ドスン。ドスン』

辺りに響き渡る足音。

それもしようがないなど、バルバスは思った。この動かしにくい

身体は思うように前へと進まない。せめてこの足音だけでも何とかならないであろうつか……と思うバルバス。

そんなこんなで地下の部屋へと辿り着く事が出来た。また入り口と同じような機類が、そのドアの前にある。バルバスは、その機類に手を差し出した。

『ウイーン』と、開かれるドア。

そこでバルバスが見たものは、心の臓を配列している妖魔達の姿であった。

「こ、これは……」

一瞬額に汗が滲む。

透明な珠から取り出している心の臓。そしてそれをベルトコンベアーに乗せて、次の妖魔がその心の臓をガラスのようなカプセルに入れている。そのカプセルは、またもや、ベルトコンベアーに乗せられて移動しそのカプセル内に液体が注ぎ込まれている。まるである種の工場のようであった。

そのカプセルは、中央の岩肌の穴に次々と運び込まれて、蓋をする、そして暫くすると再び穴を開き、また次に二十個くらいのカプセルが入れられて、再び穴に蓋がされる。

この繰り返しが行われていた。

その様子をドアの前で見ていた時、

「ちょっと君?」

バルバスに声を掛けて来る蟻の巨大化した怪物。

「あ……」

あやふやな声を漏らすしか出来ないバルバス。

「君はさつきたんじゃなかつたか?」

不審げに問い合わせられる。

「はい。すみません……あの、落とし物を致しまして……」
いかにも、困っているという様子で話し掛ける。

「落し物? それは何だ?」

「えつと……ゆ、指輪を落としたようなんです。妻にばれたら……」

焦っているバルバス。

その様子に、一応氣を使つてゐる様子で、

「待つていろ。落とし物係に聞いてやる」

カウンターのようなその場所を離れて、奥の方に入つていいく怪物。「よくそんな嘘つけるわね……」

黒装束の下に身を寄せているルー・ティーは、バルバスに呆れたと
いう風に声を掛けた。

「そんな事を言われてもな……時と場合とこういう事も有る……」

そんな細々とした会話の中、じけりに向かつて歩いて来る先程の怪物。

「何をぶつぶつと独り言をいつてゐるんだ?」どうやら落とし物の届けはないらしい。もう一度、来た道をよく調べてみるんだな」

素つ氣無く突き放されたバルバスは、

「そうですか……分かりました、そうしてみます」

あつさりドアを出た。そして再び階段を上がつて行つたのである。暫くすると入り口であつた所に戻つて來た。そこでバルバスは力尽きたかのように腰を降ろした。

「ちょっと、バルバスさん! こんな所で座つていてもしちゃうがない
じゃん!」

何時の間にかルー・ティーは懐から顔を出していた。

「しようがないではないか。この身体は動きづらいんだぞ!」

ルー・ティーの頭を指で撫でながら、答えるバルバス。

「だつたら変化を解けば良いじゃん! ?」

腕組みをして『ブクツ』と膨れ面のルー・ティー。

「そうしたいのはやまやまなんだけどね、そもそも行かないんだ。あの外で伸びてゐるやつの意識が戻るまではこの姿のままでいなけれ
ばならない……」

顎と思われる所に手を持つて行くバルバス。

そこに、入り口からの侵入者が現れた。どうやら少女のようである。

しかし、バルバスに気付く事もないその少女は何やら不機嫌そうな表情で、上に行く階段を上つて行く。

「あの顔、どこかで見た事があるような」

その後姿を目で追いながらバルバスは考えをまとめようとしていた。

「確かにどこかで見たんだ……」

と、考え込んでいる時、

「あれ？あの子システィーナに似ているよ？」

と、ルーティーが、囁いた。

その言葉でやつと思い出したのである。

「ティアラ？いや、メイジか？」

とにかく二人のどちらかだと分かつた瞬間バルバスは、元の姿に戻つた。

「あっ、バルバスさん！元に戻つたよ！」

「ああ。外の奴が目を醒ましたんだ！行くぞ！」

今上つて行つた少女を追い掛けるように忍び足でバルバスは行動に出たのである。

それは、もう東の空が明るくなつて来た頃であった。

「おい、金太。この子目を醒まさないぞ？」

朗は、近くの盛り上がりにティアラを寄り添わせる。

「手加減はしたんだぞ？」

金太は、ティアラの前に跪き、手の平をティアラの額に持つて行く。五人は、先程起こつた事の始末を終えて、暫くの間休息を兼ねて、ティアラが目を醒ますのを待つていた。

「力加減、誤つたんじやなければ、きっとかなり、疲れていたんじやないでしょうか？」

薰が咳く。

「きっと、『聖女』として自分がそうであれば良いと、この所寝るのも惜しんで、この地を守つて来たのでは有りませんか？」

セリエが、その薰の言葉に對しそう結論付けるように言つ。

「今日がその日だらう? よほど、『聖女』になることを夢に見ていたんだろうなあ」

レオナールが、『ボソリ』と呟いた。

今まさに五人の頭の中で、『聖女』といつ単語が引っ掛けついた。

「『聖女様』と『魔王』の子供が『リザード』か……どうこう経緯なんだ?」

金太は、近くの岩に肘を付きながら考え込む。

「それは、『聖女様』と、『魔王』が愛し合つてたんじゃないかなありふれたことを語り朗。

「愛? まさか……無理矢理の間違えなんじゃないの?」

金太は否定した。人間と、怪物のロマンスなんて考えられないともいうかのようだ。

「……え、本当よ」

その時ティアラの目蓋がつりすらりと持ち上がつた。

「人間と妖魔の橋渡しをする運命の子供。それが『リザード』様なのよ」

岩から少し身をよじるように身を起こすティアラ。

「おい! 大丈夫か?」

そんなティアラに対し、金太自身がやつた事なのに心配し問い合わせた。

「平気よこのくら」……それで、貴方達も『リザード』様に付く氣になつた?」

しかし、尋ねられて答えられない五人。

「決心できないの?」

再びの質問に、

「もしそうであつたとしても私達は、今のこの状況を覆す事など出来ない……だつてもう罪のない者達の血が流されたんだから…」

薰はそう答える。許せるものでは無い。

「ふん……貴方達は本当に何も分かつてないからそう断言するのよ！人間に弾圧されている動物達は何を望んでいるのか？それさえも、考えずただ自分達の欲望の為に生きてるじゃない！」

「人は皆、自分の事で手が一杯なんだよ」

「そうだ、動物を殺して食するのは、食物連鎖の一部だぞ！」

レオナルド、金太は答える。

「食物連鎖？そんな域を越えてるじゃない！何をして来たか思い出して御覧なさい！気持ち悪い、得体が知れないからと言って、殺して来たでしょう！違う？」

ティアラはまだ覚醒し切れない身体をもたげて、そう力説する。

「人間は、人間ではない者達に何も優しく接すると言つ事をして来ていな。なんとも、情けない種族かしらね！？」

と、吐き捨てるティアラ。

「その点に關しては、オレ達は否定できないかも知れない……」

朗がふとそう答える。確かに偏見というものを人間は持つていて、それは隠し切れない事実である。

「貴方は少し話ができるようだわね……」

ティアラは、朗に向かつて視線を送り、そうのたまつた。

「しかし、話し合いで片が付く事ではないのか？こんな遠まわしにやついていても、誰も分かつてくれないぞ！」

朗が、静かに諭す。

「こうでもしない限り、人間は気付かない。いえ、こうしていたとしても気付かない！だいたい話し合いで誰が出て来るの？そしてどう決着をつけると言ひつの！？」

「それは……」

誰も返答が出来ない。沈黙が走る。

「答えられないでしょ？ そうよ、人間は、答えを目の前にしてただ、呆然と事の成りゆきだけを見詰めているの！ 何もせずただ呆然と！ そして、貴方達のような存在を当てにしてのうのうと生活している」

朗は考えていた。この世界ではなく、自分達の世界の事を。

人種差別。高齢化社会、幼児虐待。そういうあらゆる問題のこと。次から次へと明らかになって行く問題に対して、オレ達人類はどう対処しているのであるうか？それに対する答えは見つけだせたのであるうか？いや見つけだせてはいけない、しかし、努力はしている。そう、しているはずなのである。

そんな時、

「分かつた。ティアラ、お前の言いたい事は飲み込んだ……ならば、その話し合いを、オレ達が付けよつ……それならば、問題はないだろう？」

金太が、そう切り出したのである。

救世主。勇者の一行の話ならば、きっと、『ミルトン』の王も話を聞いてくれる。そして、各國に伝令をまわせば、きっとこの状況を丸くおさめる事はできるかもしない。

「そうね、殺されてしまつた私の友も、そつする事で今のこの世の中をより善くして行く事ができると言つのであれば、本望かもしけないわ」

セリエはちょっとと霸氣のないような瞳でそつ語つた。

「本当にそれで良いの？セリエー？」

薰は納得がいかないかのように問いかける。

「ええ。それで、全てが落ち着くのであればこの話に乗るわ」

セリエは、今度は意志をハッキリと伝えるように、視線を薰に向けた。

「分かつたわ。セリエ……貴女がそつ語つ以上……これ以上は私は何も口を挟まないわ」

ついに薰も意志を固めた。

「そうと決まつたら、明日は『トリナ』の『リザード』に話を付けて行くぞ！」

金太は締めくくつた。

「それで異存はないか？ティアラ？」

その言葉に頷くティアラ。

「ならば、少し休め！お前らぐに休んでないんだろう？」

「……明日は私の運命がかかっているんだもの……『リザード』様にこの命捧げるために、今はできる限りの事がしたいの」

そう語つたティアラは、『フツ』と肩の力を抜く。

「君のお姉さん……システイーナさんが心配していたよ。一度顔を見せてあげれば良いんじゃないのか？」

朗は優しく問う。

「ええ。そうしたいんだけど……私は、あの結界を抜ける事が出来ないの……何度も試した事があるんだけどね。受け入れてはくれなかつた」

そういうと、静かに目を閉じた。そして、ティアラは静かな眠りに誘われていったのである。

残された五人は、その言葉を不思議に心に止めた。自分達が通つて来た道を仮にも『聖女』でも有るかも知れない者が、あの結界を乗り越えられなかつた？しかもシステイーナの妹だと言つのに？

次から次に溢れて来る疑問。それを感じ取つていたのである。

何のための結界なのであるうか？

どうして作られたのであるうか？

他の怪物達も通る事が出来ないとでも言つのだろうか？考え出しだらきりがない。

しかしそうこうしている内に夜が明ける。そしてティアラが目を醒ました頃金太郎は、『トリナ』を目指し旅立つたのであった。

「ちょっと、バルバスさん。このまま行くと、『リザード』の部屋に行つちゃうんじゃないかな？今はまだ御対面は早すぎるんじゃないの？」

懐に隠れているルーティーは、ひそひそと問いかける。

「シッ……分かっている。その辺を探り出すためには、今は危険も

覚悟している。なんなら、お前は此処で待っていても良いんだぞ？

忍び足のバルバスは、ただひたすら前を歩いて行くメイジに悟られないように後を付けていた。

「そんな事言つてないよ！ただ、気を付けてね。って言いたかったんだよ……でも、都合が良かつたね。この壁は？」

螺旋階段の中央にあるそそり立つてある壁。それは、ドア一つない壁であった。

「まあ確かに、この壁には感謝だな。何たって、後ろを振り向かない限り、我的事は知られないので済む」

案外簡単に後ろをつける事ができるから越した事のない物であった。

「さあ、少しの間此処で黙つておれよ。もう少ししたら何が起こるか分からぬからな……」

念を押すと、懐を押さえるバルバス。

『ムギコツ』

一言ルーティーは漏らすと、事の次第を受け入れて黙り込んだ。何処までも続く階段。一体どれだけの距離を歩いたであろうか？「こんなに歩くくらいだったら、この近代的な設備を応用してもっと簡単に上れるような階段を用意すれば良いものだ」

小首をかしげるかのよつにして一瞬思つバルバス。それがどういうものかは別として。

所々、外側の壁が窓の働きをしていて、外の風景が見渡せる。今はもう雲海の中に入つてゐるくらい上り詰めていた。そして、口をしが目に痛い。もう夜は明けていたのである。

昨日から寝る事を惜しんでの行動で、バルバスの足は鉛のようこ重かつた。それでも、精神力でこの事を振り切つている。

そんな時、バルバスは中央に有る壁に身を隠す。眼前にいるメイジが、行き止まりの壁の所で止まつたからである。

その様子を眺めているバルバス。

立ち止まつたメイジは、腰から笛を取り上げて吹き始めた。

すると、眩い光が辺りに飛んだ。目をこらして、バルバスは何が起きているのかを見ようとしていた。メイジが吹くその笛から出る音色が微妙に震えをもたらす時何もなかつた壁が、光の中で『ゴゴ』『ゴ……』という音を伴い開きはじめる。

その中からは白色の光が溢れていた。

逆光の中に消えて行くメイジ。その姿を消える前に捉えようとバルバスは駆け出した。

しかしその行動は虚しく途絶えたのである。

次第に収まる光の海。その残りの光を浴びたバルバスは空を抑いでいた。閉ざされた扉。そしてたつた独り取り残されたバルバス。メイジの姿はもう此処にはなかつたのである。

暫くの間ただ呆然と、立ち尽くしていたバルバスであつたが暫くすると意識を現実へと馳せた。

そしてこの事を勇者に伝える事が先決なのだとその時思つたのである。

「消えちゃつたね……」

先程までの事を見守つていたもう一人の生き物が此処にいた。
「ああ……一度外に出よう。そして勇者様達が来るのを待とう……」
この分だと容易には、この先辿り着く事は出来ないようだからな
バルバスは今来た階段を足早く駆け下りる。そして、近くに有る窓というには粗末な穴から身を乗り出した。

「ちょっと……どうするのさ！？」

懐にいるルーティーは、突然の、バルバスの行動に驚いて問いかける。

「入り口は、我的力ではもう開く事は出来ない。だから、こうやって、外に出るのだ！」

そういうと、クナイを取り出して外の壁に突き立てる。まるで口ツククライミングを楽しむかのように、この雲海の中、身を投じた。
「えへっ！まさかこんな高さを下りるっていうの？もう少し下ま
で階段で下りたら良いんじゃないかな？」

ルーティーは慌てて忠告する。

「鉢合わせがなればな」

念のために早めの大事を取つての事だと告げる。

「分かつたよ！じゃあ、あたしも自分の羽使うよ」

「悪いな。気を使ってもらつて……」

『ズンズン』と下りて行くバルバスは少し身動きが取りやすくなつた身体を上手く使って地上に向かつて下りはじめる。その周りを飛び回るルーティーは、バルバスを励ましながら、降下して行くのであつた。

そして、バルバスが無事地上に着いたのは、太陽も真上に来た頃であつた。

先程までの重労働で、バルバスの額から汗が吹き出していた。

切り立つた崖の一本道を通り抜け、昨日の繁華街へと足を向けていたバルバスは、不自然な光景を目の当たりにしていた。

地上には一匹も怪物の姿が見られない。

「何だか、不思議な夢でも見ていたかのようだ……」

『ボツリ』独り咳く。

そんな、バルバスの右肩に腰を降ろすかのように止まつたルーティーが、

「昼間は、あいつら休んでいるんだよ。夜行性だから。でも、こう見ると殺風景だね」

辺りを見渡すかのように手を額に持つて行く。

「……」

「ねえ、ちょっと休もうよ！バルバスさんも昨日から一睡もしていないでしょ？今之内に休んでおくのが良いよ！勇者様達もじきに着くだろうから？」

バルバスの顔を見上げながらルーティーは、黙つているバルバスにそう助言する。

「ああそうだな。まだ、今一つ考えが纏まらないが、そうするのが

得策だらうな

はやる心をなだめながら、バルバスは今自分にできる事がなんであるのかを考え始めていた。そして、

「ルーティー。ありがとうな？」

少しばにかみながら肩口に止まつてゐるルーティーに『フツ』と、笑いかけた。

そして、確実に勇者と出会える場所を探し当てて、バルバスは繁華街の壁に寄り掛かり静かな眠りに就く。そんなバルバスを見守るかのように、再び懐に身を寄せたルーティーも、眠りに入ったのであつた。

「ここが、『トリナ』の街？」

夕暮れの中、繁華街の大通りを金太達一行は、ただただ足を進めていた。

行き交う怪物。それを不思議そうに眺めているそんな中、ティアラに一礼をする物達が後をたたなかつた。

「慕われてゐるんだな」

こんな待遇が不思議で、ティアラに向かつて金太は言葉を掛ける。『ここ』の妖魔達は私を『リザード』様に忠実な『聖女』だと思つてゐますから……』

この道中、口数が少ないティアラは、簡単明瞭に答えた。

此処までの道のりの間、暗黒魔法や怪物は、一つも金太達に襲い掛かる事なく無事な旅をしていた。それもこのティアラによるものである。

そんな時、

「勇者様！」

姿無き声が聞こえて來た。そして、その声の主がバルバスだと気付くのに、時間はかからなかつた。周りの怪物達の狭間からバルバスの姿が目に入った時、

「よつ！バルバス！」

金太が駆け寄る。そして、無事な姿に六人は感激の対面をしていた。

そんな中、辺りは怪物達のドンちゃん騒ぎで、いつそう花を咲かせている。

「無事で何よりだつたな。バルバス！」

金太はバルバスに肩を組みながら近くの飲食店に入る。

「はい。勇者様達も御無事で何よりです」

七人が座れる場所を確保し、一つのテーブルを囲んでいた。

「ところで、そちらの方は……」

ティアラが、不思議そうに問いかけた。

「ああ、紹介がまだだつたな……」

向き合つた二人を挟んだ位置にいる金太は、紹介をしようと声を掛けた時、

「お前は……ティアラ？いや……メイジか？」

先程から気に掛かつっていたバルバスが、驚いたかのように問いかける。

「私は、ティアラ」

短い自己紹介。そして、訝しげに見詰めている。

「私はバルバス。お前の姉システィーナの、幼馴染みだ」
バルバスは、不思議そうにティアラを見詰めていた。

「ああ……思い出しましたわ。あのバスバスさんですか？」

幼い頃の記憶を辿りながら答える。そして先程までの緊張感をほぐす。

「それじゃ……塔で見たのは、メイジだつたのか……」

テーブルに肘をつきバルバスは、このティアラが何故此処にいるのかを金太に問いかける。そして、そのことについて語り始めた金太とその他の者達。

これまでの経緯の報告もかねて語り始めたのである。

「なるほど……では我々は『リザード』に話をしに行く形を取る事になったのですね……その橋渡しをしてくれるのがティアラである

と……」

ティアラを眺めてバルバスは、言葉を切る。

「そう言つ事になつた。このまま真意を知らずして乗り込むのは間違つてゐるという判断でまとまつたのだ」

朗は、手つ取り早くそう答える。

「それに内部に詳しい者がいれば、安心出来るしな」

金太はサバサバと答える。その言葉に、

「ちょっと勇者様！その言葉はあんまりです！」

ルーティーが今までのバルバスの苦労が水の泡であるかのようない種に『力チン』と来てそう言い放つた。

「こらつ！ルーティー。勇者様に何という事を言つんだ！」

テーブルの上に座つてゐるルーティーを指で軽く弾く。

「ええーっ。でもーーー！」

膨れつ面のルーティーに、『めつ』と顔を寄せるバルバス。

そんな二人の様子に、良いコンビだとでもいうかのような笑い声が上がる。

「いや、悪かつた。謝るよ。許してくれるかい？バルバスも、苦労していろいろな情報をありがとつ……にしても、メイジは、その後どうなつたんだろうな？」

と、金太は話を元に戻した。

「それは『リザード』様の元に向かつたのです……『リザード』様の住む館に」

ミルクの入つたカップを置きながらティアラは率直に答えた。

「『リザード』の館？」

六人は声をそろえて問い合わせた。

「そう。『リザード』様は異次元の館にお住まいなの。だから、私達の魔法でその道を作らない限りその次元に入る事は適わない。バルバスさんに魔法のその力が働かなかつたから、中に入る事が出来なかつたのよ」

もの静かに答えるティアラ。

「ティアラ。お前達の魔法は、暗黒魔法なんだろう？それって白魔法とは全く別物なのか？」

金太は問う

「違うといえば違うんだけど。全く別物とは言い切れないわ。だって白魔法を今では使つていなければ、私は使つていたのだから要は、応用なのだと云ひたげであつた。

その言葉に即返す金太。

たいの？」

「静かに朗と薰の方に田をやる。
から
「いえ……私は、いいわ。今までもまだ、修行が足りないんだ

薰は自分の才能に自信がなさげにそういう。

「オレもだ。暗黒魔法を使うまでに到つていな」——朗も静かにカツブを置きながらそう答える。

ニイフラは阿ハニ言ニニゲニハ、

「所で、そろそろ行きませんか？外も暗くな

ここで、セリエが話に入り込む。

その言葉に『ヒケリ』とするアリアア。何だか怯えているようで

ある。

二二二

ふと、ティーブルを離れようとした時に気付いた朗は、ティアラの肩に触れる。それを、払い除けるかのようにティアラは肩を揺らし

た

いえ……何でも有りませんわ……」「

その様子を不自然だと見極めた郎は龍かはテノアラの行動を目で追っていた。その先には青白い顔のティアラがいる。

「ああ、行こうぜー。要は『リザード』と真っ向から話をすれば良いんじやないか。簡単じゃん……」
もう張り切つている金太の言葉が、周りの空気を盛り上げる。その空氣で、一瞬ティアラの先程までの表情が変わった。

……『氣のせい』……

朗はみんなの足取りを追つて歩き始めたのである。

『聖女』よ来れ。我が『聖女』よ……そして今こそ、我が力となり、光と影を一つにじよつべ。此の地で一つにならうべ……

ティアラの脳裏に流れる調べ……それはこの地に着いてからいつも深く脳裏に響き渡っていた。

#110 果てしなく長い夜

果てしなく長い夜

七人と一匹は、繁華街を抜け出し『トリナ』の中核部へと足を運んでいた。そしてこの賑わい立つ街を後に今、その目指していた中枢部の裾野まで辿り着いていたのである。

そこで、ティアラが入り口に設置されたある機械に手を差し伸べた。

「確認致しました。後の六名は？」

ガサついた機械音が流れ来る。

「私の連れです」

「承知致しました、中にお入り下さい」

その言葉が流れるごと今まで閉まっていたドアが『シュン』と開かれた。

「なんだか、未来にでも来たみたいだね」

薰は、この地の何処にも無かつた人工的なものを初めて見て素直にそう言葉に出した。

「本当だな……でも、中はいたつてシンプルなんだな。といつか、有機的だ」

金太は中に入った感想を言った。

それから、一行はティアラの後に続き階段を上り始めた。

「この階段は一本道です。ただし、かなりの距離が有りますので、頑張つて下さい」

ティアラは、そのまま静かに後ろも振り返る事なくただ足を進める。黙々と歩く一行。

「おい……本当に辿り着くのか？なんとも一時間は歩いているような気がするぜ」

ティアラのすぐ後を着いて歩いている勇者金太は、『ボソリ』と

後ろを歩く朗に愚痴る。

「黙つて歩け。確かに結構歩いてはいるけど、ティアラが始めに言っただろ？ その内着くさ」

朗は、呆れたかのようにそんな金太を、一瞥する。

「今、半分の道のりくらいですよ。頑張つて下さい」

またしても後ろも振り返る事なく、ティアラが語る。

後、この道のりの半分……と思つだけで金太はガクツと肩を落とした。

「ほらつ！ 早く歩け！ お前だけじゃないんだぞ！」

朗が金太の背中を後押しする。

「へーい」

頭垂れながらも、金太は足を動かした。

そして再び、黙々と歩き始めたのである。

それから数時間経つて、外から吹き込んで来る風が、身体に感じ始めた時、

「この先です」

ティアラが一声かける。そして、螺旋階段をひとまわりした所でティアラが足を止めた。

少し踊り場のようになつている行き止まりの地点。眼前には、岩肌がむき出しのまま立ちふさがつてあった。

「ここで私が、暗黒魔法を使います。もちろん、貴方達を連れていけるように、術を使いますから、何もしなくて結構です。ただし、絶対に変な意識を飛ばさないで下さい。もしもの時を考えての術じや有りませんから」

振り返りそう言い残すと、ティアラは魔法を使うために念を込め始めた。

次第にティアラの身体から放出し始めた青白い光。

その光が金太達を包む頃、眼前にあつた岩肌が『ズシッ』と重い力が加わったかのように開き始めた。

眩い光。

白色のその光が金太達を捕らえた時、その虹肌のドアの中に引きずり込まれた。まるで、『ローン』と投げ込まれたかのようなその先には、宇宙が広がっていた。そして、その光の帯に導かれ宇宙を進んで行く金太達は、不思議な感覚に身をゆだねるしかなかった。

巨大な宇宙。そして、光り輝く星。

今、『リザード』の元へと向かう中、『気を乱す』訳には行かない。と、察した六人は、必死に自分を取り戻そうとこの彷彿とする入り乱れた感覚を自らの物にしようと頭を働かせる。

「御覧なさい。あの赤く光っている星が『リザード』様が住まわれている所です。

先頭に立つて導いているティアラが遙か向こうに光っている星を指さして、そう告げた。

光の速度で進んでいる金太達はその星に辿り着くまで、今のこの状況をキープしなければならない。

しかし、遙か先のその星は事もなく近づいて来る。

「もう少しの辛抱です」

ティアラは、目の前に近づいて来るその星に何やら呪文を唱えていた。すると、その星の大地が切り開かれ、その中に誘われるかのように入つて行つた。

「ただいま戻りました」

ティアラが術を解き放つた先には暗闇の中に蠟燭の炎が揺らいでる一室へと誘われていた。

まだ暗闇に目が慣れていない金太達は此処がどういう所なのか良く判つていなかつた。

「どうか、御苦労……で、どうだ？ ティアラ？」

どこかで聴いた事の有る声に『ハツ』とした金太達は、声の主の居場所を捜した。

「残念ながら私では……」

跪いているティアラは手袋を脱ぎ捨て、掌を『リザード』に翳す。

「そうか、分かつた」

腰をあげる音が、周りに広がる頃、金太達はやっと暗闇に目が慣れて來ていたのである。部屋は四角に区切られており、その部屋の中央に一つの椅子が有る。その前に、黒ずくめの男が立ちはだかっている。それが、『リザード』だと氣付くのに時間は掛からなかつた。

「……メイジは如何でしたか？」

少し震えるかのような声でティアラは『リザード』に問い合わせ始めた。

「お前に訊いたのだぞ。判るであろう?」

『リザード』は、悠然な態度で『「シリ、シリ』』と階段を下り始めた。

「……失礼致しました……では、ここに勇者の一行を連れて参りましたので、話をして頂けませんでしょうか?」

ティアラは右手を差し出し、金太達を促した。

「……時聞も無い事だ……承知した」

驚くべきことに、金太達の前へと歩み寄つたのである。良く参られた。勇者殿。初めてお目にかかる

金太達の前に跪く『リザード』

その発言と行動に一隣驚いた金太は、

「これ、何かの冗談だろ? オレ達とは『アイン』の街で出会つているだろ? が!」

金太はその『リザード』の前で突つ立つたまま畠然と見下ろしていた。

「ああ……そうかもしけないな……最近の記憶はまどろみの中なので……許して欲しい……」

顔を上げて、再び立ち上がった。

「それはどういフ……」

金太が話しつけようとした時、爆発的な音が金太や他の六人と一匹の頭に響いた。

「なんだ……これは！？」

地腸りが直接頭に響き不快感が後を立たない。頭を抱え座り込む金太達。

「我は、『リザード』この国を治める者、急に声のトーンが変わった『リザード』がいつの間にか金太の前に立ちはだかっていた。

「話し合いだ？『冗談じゃない！』この世界を治めるのは、この『リザード』だ！戦わずして、何が国王ぞ！」

先程までとは一風変わった人絡がむき出しになつてゐる。

「勇者殿！こうなつては、もう手が付けられません……戦つて下さい！」

ティアラが突然叫び声を上げた。

「ちょっと待て！？どういう事か、説明くらいしてくれないか！？」
訳が分からぬ金太は、ティアラに訊き返す。そりやそうだ。まるで話が繋がらない。

「この方は、『リザード』様であつて、『リザード』様ではない人格！本来の人格を取り戻して頂かなければ、意味が無いのです！」
「つまり、こう言つ事か？こいつは二重人格者だといいたいのか！？」

？」

金太に変わつて、朗は落ち着いて問いかけた。

「然り『リザード』様の負の人格なのです！」
と、頭を抱えているティアラ。

「……はつ！メイジは？メイジはどうしたの！？」

ティアラは突然、思い出したかのように、メイジの事を問い合わせ始めた。

「あやつはもう死んでゐる。今では我的エネルギーとして有効に働いてゐるわ！！」

『リザード』は大声で笑いながらそう言つた。そして、椅子の方へと歩いて行く。

「なんですか！？」

必死の思いで立ち上がり、ティアラは『リザード』を追つて駆け寄つた。そして、『リザード』の、腕を掴む。

「お前も、我的エネルギーとなりたいようだな……？」

掴まれた腕に絡むティアラの腕を引っ張り、振り払つたため、壁に激突するティアラ。

その様子を見た金太が、

「おいっ！いい加減にしろよな……わかったよ、もう話し合いで片付くつてのは無しなんだな……いくぞ！」

鳴り止まない頭痛を我慢して立ち上がつた金太は、懐から『サラディン』を取り出し、念を込める。すると剣先から青白い炎が沸き起こり、鍔が飛び出すと、一段と大きな炎が立ちのぼつたのである。

「承知した！！」

セリエが立ち上がり拳に力を込める。

「我も後に続く！」

バルバスがクナイを取り出し、『ジリジリ』と、足先を滑らせる。その様子に、ルーティーは、バルバスの懐から顔を出した。

「何時でも！」

レオナールは背中にじょつたボーガンを構え、『リザード』目掛け狙いをつけている。

「つまりはこう言つ事なんですね……」

朗は戦う羽田に有る運命の糸が紡がれたとでも言つかのように悟つた目で杖を振り下ろす。

「許せないのは、この『リザード』…」

薰は杖を握りしめた。そして、

「我が守護精霊ウンディーネの王よ！私に力を貸して下さい。行け！モーションフオービット！…」

『リザード』目掛けて放つた光るリングが辺りの暗闇に炸裂する。

こうして、戦いの火蓋は切つて落とされたのである。

真実の泉

「ピチヨーン」

と水が跳ねる音に気付き、システムイーナは目を醒ました。いや醒ましたと言うのは実際間違いなのかもしれない。

「今夜何かが起こる」

という気配が蠢いていた。

ティアラとメイジに危険が迫っているという不安。それがシステムイーナの心にあつたからであった。眠りの浅い眠りの中、システムイーナは、ベッドから身を起こして、小屋から外に出た。外は、涼しい風がそよいでいる。その風に誘われるかのように、元通り泉へと足を運んでいた。

泉は静かに絶えず浦月の光を浴びて『キラキラ』と輝いていた。

「取り越し苦労よね……」

そう思い立ち、きびすを返す瞬間辺りの木々がざわめいた。

「お待ちなさい、システムイーナ」

透き通った声が、風に乗って辺りに響く。

「！？誰！？」

システムイーナが、その声の主を捜そつと辺り中を見回した。

「ここです。泉の中」

その声の通り泉の方へともう一度足を伸ばした。そこに映つているのは、美しいでたちの長い髪をした女性であった。

「貴女を呼んだのは他でも有りません」

落ち着いたその声は語る。

「『聖女様』……？」

驚いてその泉に向かつて問いかける。

「あなたは、このままで良いのですか？黙つてこの状況をほつてお

くつもりなのですか？私はあなたに使命を伝えるためにやつて来た訳ではありません……貴女の意志を聞きたいが為に現れたのです」

「……」

「事実、今このこの地の主導権は『リザード』に委ねました。しかし、負の力に囚覺めてしまつたあの子を、このまま私は見てはいられないのです……どうかあの子を負でも正でもない頃に、この地が光り満ちる頃に戻したい。それには貴女の力が必要です……この意味は分かりますね？」

と、一つまばたきをする『聖女』

「……はい」

「覚えている事とは思いますが、今はシスティーナ。あなたがこの世の『聖女』なのです」

その言葉に、右の手の平を『ギュウ』と握りしめる。

「分かつてます……『聖女様』しかし私には『リザード』を許す気持ちが無いのです。もちろん判つてはいます。『リザード』の正の力は私達『聖女』の力である事を……そして負の力は、妖魔のもの……あなたが、『魔王』と恋をして、そして産まれたのがこの世に必要な存在『リザード』である事も……これから私がしなくてはいけない事も……」

悲痛に叫ぶ声が『ピシッ』とした空氣にまぎれて、そして消えた。『やはり、貴女は『聖女』の立場としてのみの感覚しか、産まれていないのですね……もちろん、そうしてしまつたのは、私なのだとうことも……』

と、寂し気に語る『聖女』。しかし、

「それでは問います。このまま、負の世界を築く事に賛成なのですか？もしそうならこの地を出る事は適いません……でも、もし、正の世界を望むのであれば、私に着いて来なさい……今すぐ『リザード』のもとに連れて行きます。十分な選択をする時間はあげられませんよ。時は一刻を争う所まで来ているのですから……」

『聖女』は泉に、勇者の一行と、『リザード』の戦いを映し出した。

「これは……」

「もう、戦いは始まっているのです……これは負の力が、正の力を十分に上回った結果です。どうしますか？此処で一生を過ごしますか？それとも……」

一瞬画像が揺れた。それはもう時間が無い証拠でもあった。

「……判かりました。覚悟は出来ました。行きます。私を、『リザード』の元にお願いします」

そうシステムイーナが答えると、

「今、この泉をあの地につなげます。システムイーナ、泉にお入りなさい。そして、月を掴むのです」

次の瞬間『聖女』は月を泉に映す。システムイーナは、その泉に静かに身を投じた。そして大きな月を掴もうと手を伸ばしたのであった。

黒装束が、この暗闇の中舞う。

それは、あらゆる光を浴びながら、ゆっくりと、シャープな弧を描きながら。その周りには、光の勇者が立ちはだかっていた。

「どうした？お主達の力はこの程度しかないのか！？」

はやし立てる『リザード』。

「くつ」

これ以上どうする事も出来ず、金太が歯がみをする。この人数であれだけの攻撃で『リザード』にまだ一太刀さえもダメージが与えられない。

「何なら我から出向こうか！？」

と、腰にさしている剣の柄を握りしめ、そして、躊躇なく引き抜いた。辺りに妖気が走る。それに気付く朗。

「金太！引け！」

と大声で叫んだ。妖気を放つその剣は、黒々とした妖しい光を伴つて、金太の顎上に輝いていた。

「ちつ！」

その事に気付いた金太は、間一髪でその剣を『サラティン』で、防いだ。

でもその力は金太を押しつぶすかの勢いで覆いかぶさつて来るのである。

「ほう。よく防いだな？でも次の攻撃はどうかな？」

その剣を手前に引くように滑らせ、横から金太目掛けて斬り付けようとした。

その時『フツ』と辺りに光が走った。

そのことに気付いた『リザード』はその光の元凶に目を馳せた。眩しい光。それは、この部屋の暗闇をも消し去りうとするくらいに輝いていた。

『『リザード』よ、お前の力はこの私が、打ち消してあげるわ！』

光に包まれた、その光の中から一人の女性が現れたのである。

「システムイーナ！」

「システムイーナ……さん？」

その女性が誰であるのかが分かり、皆の動きが止まってしまった。

「ティアラ……遅くなつてごめんなさい！」

システムイーナは、ティアラを優しい瞳で眺めてそう言つた。

「システムイーナ姉さん……」

ティアラの声を聞き、安心したシステムイーナは『リザード』に向かつて、

「待つてて、今、『リザード』の力を弱めるから」と言つと、右の手の平を前に差し出す。

「我命じる。この場を取り巻いている負なる力よ。我が力の元に跪け！我光の申し子なり、闇は光があつてこそ世界なり！」

唱えると、手の平に刻まれた紋章が光りはじめる。紋章の通りに浮かび上がつたその光の線は光の束となり『リザード』目掛けてまるで翼があるかのように飛び立つ。

「何ー？まさか、お前が……！？」

その光を浴びながら、『リザード』は、身を退けようともがいた。

が、引き寄せられるかのようだ、光の渦に身を投じたのである。

その光に包まれる『リザード』は、うめき声を上げながら、その場につつ伏した。

「どうしたことだ……お前が『聖女』だなんて……計算に入つていなかつた……」

『シュン』という、音を伴いながら、蒸氣する『リザード』その『リザード』に駆け寄るかのようにシステムイーナは、身を解き放つた。

「私の魂を譲るわ！受け入れなさい！」

虹色に輝く光が閃光となり煌く。その瞬間、システムイーナの身体が宙を舞つた。そして美しく散つたその身体は、静かに床に倒れ込む。

啞然と見守つていた一同であつたが、倒れ込んだシステムイーナに気付き、その身体に駆け寄つた。

「システムイーナ！」

バルバスを先頭に、駆け寄つた一同は、その身体を抱き起こす姿を見守る。

「システムイーナ姉さんが『聖女様』だつたなんて……」

今でも信じられないティアラは膝から崩れ落ちた。しかし、駆け寄つたシステムイーナの鼓動は既に止まつていたのであつた。

そんな中、その様子を静かに見守る者が今、この場所にいた。朗である。

朗は次第に小さくなつていいく『リザード』の身体を見守つていた。そして、

「何してんのだ、金太！今だ！『リザード』を切れ！」

その言葉に『ハツ』とした金太は、目の前に倒れ込んでいる『リザード』田掛けて『サラティン』を振り上げた。

『ザンジー』という音と共に、手こたえが感じられた。しかし上がるはずである血飛沫が上がらない。変わりに、黒い煙が立ち上つた。

「……これは？」

金太は『サラティン』を構えたまま立ちつくす。

『貴方が切つたのは、負の我です』

そう言いながら膝をつき立ち上がる『リザード』。

「ありがとうございました。私は負の力に負けて、正の力の中に沈んでいた状態だったのです……それが今やつとゼロの状態に戻りました」

立ち上がつた『リザード』は、見た目三歳くらいの子供のような姿をしていた。大きな青い瞳が金太を静かに見上げていた。

それを、見下ろす金太。

「ゼロ？」

問い返す。

「そう、正でも負でも無い、始めとなる力。無の存在」

そう言つと悲しそうな瞳で金太を見詰める。次第に辺りは澄んだ光に覆われた。そして『リザード』は、何かを吹つ切るかのように金太を背にして階段を上り椅子の前に来ると、手を置く肘掛にあるスイッチらしきものを押した。

『ブーン』と言つ音がして、辺りの壁が透明になった。

すると、その透明な壁の中に数百個の心の臓がホルマリン漬け状態になつて登場したのである。

「!?

一瞬の吐き気が金太達におこつた。

「これが、負の我を作つた元凶だ。そして私は、こうして生き続けて来た」

壁際に近づき『リザード』は、また一つのスイッチを押した。

『ドバーッ』と第一の透明な壁が解き放たれ、勢い良く流れ込んで来る水。それは第二の透明な壁の前で止まつた。

次第に水嵩が減つて行き、そして、その壁の向こうは空洞と化した。

「何をやつたんだ！」

金太が拳を振り上げて問いかける。

「全てを無に……そうしなければこの磁場が歪んでしまう……我が

また負の我になつてしまつ……」

金太達一行を背にしたまま答える。

「何を言つてる！？自身がした事にはちゃんと責任を持てよ！？」

金太は突然の事に自分でもわからずそう口走る。

「そうしたいのは山々だ……しかし我にできる事はこれ以上はない

……全てを無にする事……それしか我は学んでいない」

「つまりは何か？ゼロの状態は、全てを無にする力を発動する要因であるとでも言うのか？」

システィーナの側にいる朗が問いかける。

「そう。無に還す力……それしか学んでいない……何かを造り出す事など我は学んでいない……」

その場に崩れ落ちる『リザード』。

「ならば自らに問い合わせろ！今は『聖女』であつたシスティーナが、お前にはついている……つまり彼女から学ぶ事ができるはずだ！正の力が、彼女の魂に同化しているのなら、何かを託してくれるはずだ！」

朗は冷静に事態を把握していた。近くに有るシスティーナの遺体。それが何かを伝えたがつてはいるようだ……

「正の力……我はこの力に包まれていたかった……母上の力に憧れていた……しかし我は、憎んでさえいた……何故我をこの世に産んだのか！」

『リザード』の言葉には悲哀が籠つていたのを誰の耳にも判つたのである。

時よ永遠に……

「ここは、『聖女』の泉。生まれて間もない頃の森の外れ。時同じくして『聖女』と、『魔王』が住む砦。

「『リザード』。貴方はね、ゼロのまいまいなければならぬ存在なの。でもね、それが大変酷な事は承知している……でもこの先、必要になつて来る力であるはずなの」

『聖女』がそう語つた。

「そうだぞ。お前の手に全ての時の流れが決まつてしまつ……その力が必要な時どうすれば良いか判断する能力が必要だ」

『魔王』が語つた。

「お父さん、お母さん、ゼロの力つて一体なんなの？」

幼い『リザード』は問いかける。

「それは、私達には創造出来ない力……そして貴方自身が体験し、感じてくる物。私達には教えてあげる事は出来ない」

『聖女』は告げた。

「お母さんも知らない力？そんなのボクには分からないや」

「大丈夫だ。お前の思う通りに生きてみよ……されば血の道は開かれるであろう」「う

と、『魔王』が語る。

まだ子供だった『リザード』の心の中に有る光景。それが溢れだしの場にいる者達は共にそれを感じ取つていた。

「自ら分かる事なんてこの程度だつた。ゼロは正でも、負でも無い力……そんなもの何処にも無い……消えて無くなつてしまえば良い」とさえ思つた。だから、無がゼロの力だと悟つた

頭を抱えて小さな『リザード』は、その場に崩れるかのように座り込んだ。

「『リザード』お前の気持ちは分からんでもない……たつた一人で手本となるものもないで……そして長い時間をして来た者として、どうすれば良いかを考え続けて来た苦しい状態を、今さらオレ達がどうにかしてやる事なんて出来ない」

金太は話始めた。

「だけど、オレだつたらゼロという力を調和の力として使うな。正と負が、互いに交わる力として！」

金太は思った事をそのまま助言として『リザード』に語った。
「金太にしてはまともな事を言うな。そうだな……調和として使う力は、正の力としても負としても伴う力としても、同じ事。特別な存在になる事は無い」

朗が、答える。

「調和の力？」

「そう。お前は、妖魔達に情けをかけた。その結果、力は妖魔を助けるために働いた。つまり、これを負の力とする。そして人間達を正の力として、心のどこかで哀れんでいた。つまりこの二つの力を調和に導く力をゼロの力とすれば良いというわけだ」

と、朗は具体的な例を上げる。

「……今からでも遅くはないと思うわ『リザード』……君がそう願うなら、まだまだこの話は終わらない。始まりとなる……」

薰は立ち上がりそう確信を持つて言った。

「始まり……」

『リザード』は抱え込んだ頭をもたげた。

「私達も手伝います……この世に人間と妖魔の調和した世界を作るために！」

セリエが言い放つた。

「我も、及ばせながらお力を貸し致しますぞ」

バルバスが答える。そして、バルバスの懷にいるルーティーは事の次第を飲み込み、その言葉に頷く。

「右に同じ！ そう言う事なら僕も力を貸してあげる

レオナルドが拳を振り上げて立ち上がり答える。

「『リザード』様……私も志を共にしたいと思います！」

ティアラも微笑みながら答える。

「ほら……みんなが、手伝ってくれるだらう？『リザード』お前のやり方が、間違つたやり方であつたと反省出来るなら、きっと助け手も増える……つまり、お前の望んでいる正の力を発せられる。もちろんその間に起こる嫌な事が負の力であつたとしても、きっと一步前進出来る！」

すばやく朗がまとめた。

「みなさん……ありがとうございます！」

一言そう呟くと『リザード』は、壁伝いに手をつき、身体を起こしてそして立ち上がり、金太達の方を振り返った。

「…そうと分かつたら、『ミルトン』の王女様達を連れ出さなければ。で、一人は何処にいるんだ？」

金太は、そう『リザード』に問いかける。

「あの一人は、隣の寝室に匿っています。負の我も、さすがに手を出す事が出来なかつた……正の我が要の人質として連れて來たのですから」

隣の寝室へと金太達を案内する『リザード』。何時の間にか、部屋の中は昼間のように明るくなつていて蠟燭の火も必要無くなつていた。

「い！」です

扉を開く『リザード』。

中には、様々な本が積み上げられていた。そしてその本を退屈しおぎでもしているかのように、読んでいる王女様一人は寝室のベッドの上に座つていた。その一人を金太越しに見た時薰は啞然とした。

「久美子！ 裕美！」

どうしてこの場所にいるのかとも思える程、二人は久美子と裕美に似ていた。

「誰？」

問い合わせられた時、虹色の光が薫の身体から放出していった。それに驚いた薫は、

「金太先輩！朗先輩！」

目の前にいる一人に呼び掛けた。

そこには同じように虹色の光に包まれた金太と朗の姿があつた。
「はつ！」

一瞬のスパークに目をこらした薫が見たものは暗幕の掛かった一室に、金太と朗が、占い師の格好をしている姿だった。

「ろ……朗……先輩」

テーブルの前の水晶に手を翳している朗。その後ろに立っている、

金太。

「き……金太……先輩」

庫れる身体に力を込めて薫は唇を動かした。

「戻つて来たな？」

朗が一息つく姿勢を取る。

「……ああ。にしても、今回は長かつたな……」「

ぎこちなく腰に手を掛けて捻る動作をする金太。

「あれで、私達の役目は終わつたつて事なの？」

薫はイマイチ納得が出来なかつた。

「きつとあれ以上、首を突つ込む事は許されないんだがつ……気まぐれな神が見せた幻影に過ぎない」

「まあ、もつとも、答えはそこについたのだし……気付いた時点で、オレ達は無用な存在だつたからな」

『「コキコキ』と金太の首の骨が鳴つていて。

「でも、ちゃんと最後まで見たかつたな」

薫はやはり、納得できないかのようである。

「ダメだよ、それは。あの話は、始まりを見付けたんだ。つまり、オレ達はスタート地点を見つけ出すスペースだつたんだよ。終わりはきつとない」

朗は静かに微笑んだ。その真意に気付いた薫は、

「そうですね……」

と、思いを馳せながら答える。

「さてと、改めてなのですが、占いは如何致しますか？」

と金太が問いかける。

「そうですね……身近に起る事。この学校を受験したいのですが受かるか受からないかを占って頂けますか？」

その言葉に、金太と朗は顔を見合わせる。

そして、

「わが校へようこそ！――」

三人の笑い声が教室中に響き渡つていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1423d/>

TWINS～果てしなきゼロ～

2010年10月8日15時01分発行